
ソードアートオンライン ～ 剣を継ぐ者～

ほうる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソードアートオンライン ～剣を継ぐ者～

【Nコード】

N9994Y

【作者名】

ほつる

【あらすじ】

「力が欲しい、強くなりたい。レベルを越え、スキルを超越した強さを手に入りたい」レベルがすべてを決めるレベル制MMORPGソードアート・オンラインの虜囚となってしまったユウは、ソロプレイヤーとして自分なりの強さの形を模索していく。そんなある日ユウは賞金稼ぎの女傑、『風』のシズカと出会うのだが……。この小説は電撃文庫、川原礫先生出筆の「ソードアート・オンライン」の二次創作になります。内容は若干のIFモノと終点は同じですが、そこに至るまでの道程をオリジナルキャラクターを通して別視点か

ら描いています。原作の設定にはある程度忠実でいようと思います
が、オリジナル設定があるため原作との差異についてはご了承下さ
い。また、本作は主人公の成長物語であるため、結果的にはオレT
UEE展開となりますのであしからず…。

序（前書き）

はじめての本格的な小説＆二次小説です。
よろしく願います。

序

「師範代——どこですかー、師範代——」

サラマンダー特有の鈍い羽音を響かせながら、赤い髪を後ろに流した青年グエンが世界樹の街アルンの空を飛び回っていた。それなりに端正な顔つきの上に乗った人の良さそうな丸い瞳と、きりりとした太い眉が特徴的なこの青年は、もう後数十分ではじまってしまいう今日の主賓の演舞、その主役である彼の師匠を探していたのだ。

今日の演舞は模範演技。それも内外から観客を呼び込んだ大きな会とあって、剣と修練のこと以外にまったく興味のない彼の師の代わりに事務方全般をこなしているグエンは、数日前から右に左に大急がしだった。

そして一時、目を離せばこれだ。

師範代の風来坊ぶりには慣れているが、今日くらいは真面目に指導者らしくしてほしい。そんな風に思いながら、グエンは深くため息をついた。

アルンの街は小さな現実の町くらい規模があるが、師範代の行きそうな場所はいくつかピックアップしてある。

行きつけの宿屋に最前武器屋、こじやれたカフェテリアと師範代の行きそうな場所を一つ一つ潰していく。

あらかた普段行きそうな場所を潰し終わると、あとはもうあそこしかない、そんな祈る気持ちで羽音の速度を上げていく。アルンの街の中心からかなり外れた、街全体を見渡せる丘。そこに立つ一本の名も知らぬ木の根元に、その探し人は暢気にも寝そべっていた。

「探しましたよ！師範代！」

呼びかける声にビリオネの葉を啜えたその人物は、着物をきつちりと着込んでいながら、だらしなく草地に寝そべり、グエンの声に「おう」とだけ応えた。

ビリオネの葉は噛むと甘い、師範代の最近のお気に入りだ。

「まったく、どういう御つもりなんですか師範代！演舞を引き受けたのは師範代でしょう？！だというのに、あなたという人はちゃんと礼節には疎いんですから！聞いてるんですか？師範代！ああ、後30分もない！」

腰には長くも短くもない日本刀に似た武器を指したグエンは、腰に手を当てて師匠をなじる。小一時間空を飛びまわさせられて、小言のひとつでも出ようというものだ。

「そう急くなよグエン。わかってる、今から飛ばせばギリギリセーフさ」

「それは、まあそうですね…。それにしてもどうしたんですか？この場所、嫌な思い出があるんじゃないかなかったですか？」

グエンも師範代の横に腰を下ろし、アルンの街を一望できるこの場所をほんの少しの感慨の元、遠くを見つめた。ゲーム内時刻は昼を過ぎたあたり、だが現実時刻はそろそろ夕刻になるうとしている。街を飛び交う羽音も徐々に賑やかになってきていた。

「いやね、昔のことを思い出していたんだよ」

「昔のこと、ですか？」

首を傾げるグエン。そういえばこの自由奔放な指導者のことを、グエンはほとんど知らない。

「そう、昔のこと」

師範代と呼ばれた人物はザンバラに切った頭の、その下に敷いていた腕を伸ばし、空を仰いだ。

「そんな遠くもない、でももう取り戻せない、ずっとずっと昔のことさ」

その瞳は遠くを見つめ、いつも慄然して隙のない師範代にしては、やわらかい色で染められていた。

「おっと、そろそろ行かんと不味いなグエン。会場まで一気に飛ぶぞ！」

「ええ、これで間に合わなかったら料金まで取った手前、殺されても文句が言えませんよ」

キイインという弦楽器が鳴るような音を響かせながら、2メートルほど飛び上がりホバリングすると師範代は一気にその速度を上げた。師範代の飛行速度は、飛ぶのが得意なシルフ族だけあってかなり速い。それでも先日行われた、アルヴヘイム横断レースの2トップに比べたら随分と遅いが、この師範代はどうも底が知れないところがある。

師範代の弟子になってもう3ヶ月になり、道場の中でも一二を争う腕となったグエンだが、師範代との模擬試合で師範代が武器を持ったところを見たのは数えるほどしかない。むしろ師範代に武器を持たせたら勝ちと思えるほど、実力に大きな開きがあることをグエンは感じている。

（本当にこの人は何を考えているんだろうか……？）

「グエン、少し飛ばすぞ」

「は、はい」

そんな師範代だから、剣術の指南の際でも滅多に武器を抜くことがなく、そしてさらに言うなら剣を振るう姿は天然記念物級と言っても過言ではない。そういう事情もあってか、グエンは今日の師範代の模範剣技をかなり楽しみにしていた。

ゲーム内時間で午後2時から始まる剣舞大会は、アルヴヘイムオンライン中にある オリジナル・ソード・スキル の修練所の寄り合い大会であり、その中でもグエンの所属している道場、無限一心流 は、師範代が最大連続七連撃の技 ノウゼンカズラ を放つことで有名。それなりに名の通った道場だ。

月に一度行われる模範剣技ならびに稽古は、アルヴヘイムオンラインで名を上げようと躍起になるプレイヤーたちの憧れであり、自身の実力をひけらかさないトッププレイヤー達の影に埋もれてしまう一般プレイヤー達にとっても、目標を直に目にすることのできる数少ない場だ。当然心が躍るのも無理からぬことだった。

「師範代、今日の模範戦技。7対1ですがいいんですか？」

「なに、問題ない。一人ずつ倒せばいい話だろうに。それに、最近

は腕のあるやつは浮遊城に行ってしまったって、ロクな者がおらんしな……」

と、遠い目をする師範代。師範代はプレイ期間的にはグエンよりずっと少ないと知ったのは、つい最近のことだ。グエン自身はサラマンダー領でひきこもり、ネグレイドになることもできず1年を領地安定のために捧げてきたプレイヤーだったが、半年前のアップデートで開放された浮遊城アイン・クラッドのオープンに伴い、ついに領地を捨てた。

あんなにもいがみ合っていたシルフとサラマンダーが中睦まじく歩く姿をアルンに来て始めて目にしたグエンは、衝撃とともに一縷の感慨を得て、自分の中でのネグレイドに対する考え方を改めさせられた。

そして今は、シルフの剣術家の門下生になっているのだから、不思議なものだ。

グエンは少し前を飛ぶ師範代の背中を見た。美しい四枚の羽が虫の羽根のように羽ばたいている。とても線の細い華奢な背中だった。だというのに、師範代の全力をグエンは一度としてみた事がない。今回の剣舞大会もあの人にとって足りうるものとなるだろうか……。

そんなグエンの内心とは裏腹に剣舞大会会場の、アルン中央競技場とも呼ぶべきコロセウムのような建造物が視界に入る。師範代とグエンは後ろの羽根をめいっばい広げ、減速しつつ着陸態勢をとる。コロセウムはすでに観客であふれかえっていた。

「遅いよ！冷や冷やしてたんだから！」

「いや、ユキナごめん。ちょっと思うことがあってね」

手のひらをひらひらとさせ、昔からの友人であるウンディーネ族のユキナをあしらうと、控え室に引込み師範代はおもむろに装備を着替え始めた。唐草色の露芝紋から見目鮮やかな藤色の色留袖をまとうと、悠然と競技場へと続く扉を開く。

「師範代、準備は良いですか？」

「準備万端、って感じね！」

グエンとユキナが迎える。

「ああ、問題ない。グエン、ユキナ。すぐに終わらせてくる」その手には珍しく日本刀に酷似した直剣を左手に握っている。「今回は演舞だからな、たぶんこいつを使うことになる」

「師範代、本当ですか！やったあ！」きらきらと目を輝かせるグエン。それにあきれ調子でユキナがため息をついた。

「はいはい、存分に楽しんでらっしゃいな、わたしは観客席から見てるから」でも、と付け足すように嗜めるユキナ。「あんまりやりすぎて、相手の心に傷を負わせるようなことはしたらだめだぞ。あんたはただでさえ、加減てものを知らないんだから」

「わかつてるよユキナ、相手の見せ場を造って勝つ、だろ？」

わかればよろしい、とユキナが頷く。

「さあ、そろそろ時間だ。ひと暴れしてくる」

こつぱりを音高く鳴らしながら、師範代は闘技場のアリーナへと足を進めた。歓声とトトカルチョとその他有象無象が渦巻く戦場へと、黒髪の剣士はゆっくりと歩みだす。

時は正午を過ぎ、頂天を過ぎた太陽が目にもぶしい。

「——さて、参ろうか」

——バシイイイ！

決闘を告げるシステムのサウンドエフェクト、ポップする7つのデュエル申請。

そして剣士は音高く、腰の愛刀を抜き払った。

1・【シルフェンドとの1vs1デュエルを受託しました】

【シルフェンドとの1vs1デュエルを受託しました】

60秒のカウントダウンの後、決闘が行われる。

決闘。

それは娯楽が食事以外では皆無といってもいいだろうこの ソードアート・オンライン の中では、食事をのぞけば唯一『遊び』と呼べるイベントだ。

人は死なず、互いの剣技をぶつけ合い、全身全霊を持ってフェアに戦う。

これが娯楽でなければ何であるというのだろう。

この ソードアート・オンライン がデスゲームと化してから、早一年。わざわざ死のリスクを負ってまでする狩りはむしろ作業に近い。腕試しはしたいが、モンスター相手では危険が常に付きまとう。そういった理由で度々行われるこれら野良デュエルは、プレイヤーたちの間で少しずつではあるが、確かな娯楽となりつつあった。

オレは 初撃決着モード を選択し、背中に吊るした愛刀に手をかける。まだ剣は抜かない。愛刀 ブラウ・ソード の柄に手を添えて、重心を低く右足を前に心持ち出す。

完全な受けの構え。

しかしこれがオレの、他人がつけた通り名 両刃剣 のユウの自然な構えだった。

片手剣抜刀術といえば聞こえがいいが、何のシステムアシストもない技ゆえ、大した威力が出るわけではない。しかし規定外の技ゆえに抜剣からの剣撃、そしてリーチが読みにくい。

モンスター相手では何の役にも立たない構えだが、相手はプレイヤー。初動の読みあいすべてを制するといっても過言ではないデュエルにおいては十分な効果がある。オレはその一瞬にすべてをか

ける心持ちで、背負った剣ではなく、空手の左手に意識を集中させた。

相手はかなりの高レベルプレイヤーと思われる男。シルフェンド。攻略組の中ではある程度名の通った片手剣盾戦士だ。中肉中背と特徴は薄い、その眼光は数多の修羅場を潜り抜けてきたことを容易に想像させる。

オレが受けの体制で来ると見て、盾剣士シルフェンドはその取り回しに重点の置かれた小さめのラウンドシールドをきつく胸に寄せ、抜剣した片手長剣を水平に前に突き出した。

明らかな突撃の姿勢、上位片手剣技 グランド・ストライクの構えだ。加えて左手は盾をしっかりと体に寄せ付け、鉄壁の陣を敷いている。正面からまともに打ち合えば、体重もステータスも劣るオレなど軽く吹き飛ばしてしまうことだろう。

聴衆が野次を飛ばす。

商魂たくましい商人などは、酒やつまみを売り出して喧騒は収まるところを知らない。ギャラリーが増えることにはあまり良い感情を持っていない。オレは単純に強くなりたいだけなのだ。ソードアート・オンラインのような、レベル制MMOではレベルの高さこそがすべてを決める。

だが一方で、印象、名声、そういった一見価値にならないようなものをどうしようもなく求めてしまうやからも存在する。

オレはそういう性質のプレイヤーの中でも、とりわけ強さを求めるMMOerだった。

MMOとは突き詰めれば、所詮リソースの奪い合いに尽きる。より相手よりも早く、より強くなるとする精神。自己満足。そういうクソったれな陶酔感を得ようとするどうしようもない人種ばかりが集まるのが常だ。

スタートダッシュに乗り遅れ、攻略組に後塵を拝してはや数か月、強くなりたい一心でオレは剣をふるい続けた。しかし寝る間も惜し

んでレベルを上げたつもりが、ソードアート・オンラインのトッププレイヤーたちとの差は広がるばかり。オレは一日だって狩りを休んだことはない。だというのに……、いや分かってはいる、分かってはいるのだ。

これがソロプレイヤーの限界。効率の差、死線の差だ。

オレはソロで十分なマージンを取って中層あたりで死なない戦いをしていたが、攻略組のやつらは違う。常に死と隣り合わせの状況で強敵を倒し、さらに十分な経験値や装備を得ている。差がつかないという方がおかしいのだ。

カウントが30を切った。

だが、レベルがすべてを決めるそんなレベル制MMO ソードアート・オンラインの中でたったひとつ、このデュエルだけはその法則を覆すことができる。

初撃決着モード

そう、ただの一撃。

たった一撃のクリーンヒットでいい。

相手よりも早く、その一撃を見舞うことができれば——いや、その持てる剣技で一瞬でも上回ることができれば——、レベル制MMO上での強さという序列に念願の蹴りを入れてやることができるのだ。

カウントが進むにつれ徐々に神経が研ぎ澄まされていく。

あんなに騒がしかった野次馬の喧騒が嘘のように引いていく。

この感覚に酔いしれるあたり、オレは根っからのPvPerであると自覚する。

相手との距離、約7メートル。

シルフェンドの高レベル剣技をもってすれば、一息のうちに詰められる距離だ。

油断はない。視界端に映るカウントダウンのポップアップを左手で消し、シルフェンドの動きに合わせる。カウントダウンなど見る必要はない。相手が動いた時、それが決闘の合図となる。軽く相手とのアイコンタクト。もはや言葉ではない境地での礼節。それだけでデュエルの挨拶には十分なのだ。

バシイイイ！！

雷鳴がとどろくようなデュエル開始の合図と同時に、シルフェンドが猛烈な突進を見せた。シルフェンドのブーツの鋳が石畳とこすれて火花を散らす。

「せやあああああああああ！」

音速の壁を越えんとする轟音を響かせながら、シルフェンドの剣が迫る。そこに半拍遅れてオレが反応する。俊敏値と俊敏値のせめぎ合い。オレはすかさずバックステップを試みるも、レベルの分やはり相手の方が一足早い。

シルフェンドが駆る片手用長剣が紫のライトエフェクトを運び、オレの胸の中心に吸い込まれるように入っていく。コンマ数秒の戦いとなるは必至。そこでオレは思いつきり上体を捻った。右足を軸に一時的に半身となる構え、一瞬遅れてオレが居た位置をシルフェンドの長剣が通過する。しかしシルフェンドの攻撃は終わらない。

グラランド・ストライク は猪突猛進な動きでありながら、素早く横薙ぎへと変化可能な優秀な突進系スキルだ。初撃を回避されたと見るやシルフェンドは流れるような動作で水平にした剣を横に薙ぐ。しかしその一連の動作は当然オレも読んでいた。さらに上体を落とし、かがむような姿勢でそれを回避する。そしてソードスキルを出し切ったことで生まれるシルフェンドのディレイタイムに合せ、立ち上がりの一挙動のまま左手の五指を揃えたゼロ距離体術技、イエローに輝く無手手刀突き エンブレイサー を左斜め下から叩きつ

けた。だが、シルフェンドもさすがの反応速度を見せ、ラウンドシールドで受けとめる。

ガキイーン！という硬質な物同士が衝突する音を響かせ、シルフェンドの盾とオレの左腕が打ち上げられる。一瞬の浮遊感覚。まさかの エンブレイサー に一瞬驚きの表情を見せたシルフェンドだったが、そこは流石に古強者。剣を引き、第二撃へのモーションを起こそうとしていた。だが、ヤツのそんな行動を待つてやる必要はない。右手は剣に添えたまま、右足で着地したオレは次いで着く左足を軸に近接体術 レッグダウン 、浴びせ蹴りを見舞う。

「セアッ！」

足を覆う緋色のエフェクト。しかしこれも盾でやすやすとガードされる。体術があるとバれてしまえば、シルフェンドのクレバーな盾さばきの前では小手先の技など何の役にも立たない。再度生まれした派手なライトエフェクトと力と力が反発し吹き飛ばされたオレの体は3メートルほど宙に浮きあがった。

そこを勝機と見たかシルフェンドの素早い突きが迫る。そこで初めてオレは剣を抜いた。いや、抜かされたというのが正しい。空中で瞬時に斬りおろし、シルフェンドの突きを踏み台にするように空中に身を躍らせる。さらに飛び上がる身体に鞭を打って、空中で剣を左手に持ち替える。そして右手は上段からの斬りおろしのモーションを見せつけ、その実左手に剣を逆手に持った。視界に映る【Equipment is imperfect】装備不全の文字。

これがオレの奥の手だ。

「くっおおおお！」

めいっばい身をしながらオレを見て当然切り下ろすと読んだヤツは盾を上に向ける。そこを大振りな空手の右腕が通過する。当然剣が来ることはない。オレの剣は左腕にあり、背に隠してヤツからは見えないのだ。

振り下ろした無手の右手でそのままシルフェンドの盾を下からつかむと、俺は着地した足の力のまま盾を強引に持ち上げ、逆手に持

った剣で無防備なシルフェンドの腹を横薙ぎに引き裂いた。

片手剣基本剣技　ホリゾントル　のアシストがなくても、鍛え上げられた筋力パラメータと俊敏値が複雑な計算を行い、攻撃の成功をシステムが判断する。と同時にシルフェンドのヒットポイントバ―がぐぐつと下がった。ライトエフェクトのない地味な一撃。

しかし、誰が見ようにも明らかなクリーンヒット。

これがオレの秘技、剣のスイッチだった。

両手効きであるという利点を最大限に生かした奥の手である。直後、デュエル終了と勝利者の名を告げる紫色の文字列がフラッシュした。

ワツという歓声。勝者敗者を問わず、拍手と激励の声が上がる。

オレは血のりを払うように剣を振り、背中に収めるとほうとひとつ息をついた。

「ふふ…」とそれに対し、シルフェンドが不敵に笑う。

オレは一瞬身構えたが、それが杞憂であつたとすぐに理解した。

「くははははは！」

シルフェンドはこれはたまらない、というように笑っていたのだ。「これが噂に聞く両刃剣か！おい君、最近高レベルプレイヤーにデュエルを吹っかけまわっているそうじゃないか！上のほうじゃあ結構噂になっているんだよ。ちなみに戦績は？」

「一応、11戦全勝……」

「ほう！」と片手剣士は口笛を鳴らす。

「そりゃあ大したもんだ！どうだい、君ソロなんだろう？」先ほどまで熱戦を繰り広げた相手とは思えない変わりよう、その剣幕がうそのように即座に手を差し伸べるシルフェンド。

「うちのギルドなんかどうかな。最前線でもっと強いやつらと出会うチャンスがあるんだが」

勝負には負けたが、よい戦いと判断したのか。清々しい表情のシ

ルフェンドがオレに言ってきた。さすが攻略組のギルドマスター、懐の広さが違う。レベル的におおいに劣るオレに、試合後良い感情を持ってくれるプレイヤーは思ったよりも少ない。格下に負けてなお、手を差し伸べられるプレイヤーはあまり居ないのだ。

だがこの男、シルフェンドは違うようだった。

「いや、やめておくよ。判ると思うけれど、レベルがぜんぜん足りないんだ」

それに、とオレは視線を泳がす。

その様子に何か感じ取ったのかシルフェンドが言った。

「まあ、いろいろとあるだろう。それにレベルやスキルを聞くのはマナー違反だしな」

それにしても惜しいなあ。久々に面白いやつに出会えたのに、と特徴の薄いと思われた表情を人好きのする笑顔で崩して、さも残念そうに唸る。そこにぞろぞろとシルフェンドの仲間であろう、一見して高レベルとわかる集団が駆け寄ると「いやあ、やられましたね隊長！」などと笑い合っている。

このシルフェンドという男、特徴が薄いのは別として仲間からは信頼されているようだ。

「それじゃ、オレはこのへんで」

「ああ、また会ったときはまた手合せ願う」

胸に手を置き、同ギルドと思われる数人がザッと居住まいを正す。見事にギルド式の敬礼で見送られた。

それにオレは軽く手を挙げて返した。

あれほど集まっていたギャラリーも決闘はもう終わりと見て転移門前の広場から、三々五々に散っていく。

時は夕暮れ、朝一番で出かけていた勤勉なプレイヤーたちが、商人系プレイヤーに今日の成果を買い付けてもらうべくいそいそと歩いていき、街はあつという間に人でこった返し始めた。このアイン・クラッドの第3層の街ケイブタウンでは、ケイブ、洞穴の名の通り良質な金属が取れやすいことから鍛冶職人系プレイヤーにはうつ

てつけの場所になっている。

だが低層ゆえシルフェンドのような攻略組が来るのは珍しい。子飼いの鍛冶屋でも居るのかもしれない、そんな風に思いながら細い洞穴を縫うように歩いていく。

あのようなトッププレイヤーと出会えるなど、全体から見て中の上程度のレベルであろうオレにとっては僥倖につきる。またひとつ自分に自信が持てるような気がした。

現実世界での季節はまだ肌寒い冬の終わり、2月中旬に相当する。季節感設定が現実世界と同期しているこの ソードアート・オンライン では、日々温暖化が叫ばれ、暖冬と呼ばれる渦中にありながらも、きつちりと冬の様相を呈している。まだ鍛冶屋向けの主街区のある33層はそれでも暖かい方だが、もっと上の層には冬と言うよりもブリザードが吹きすさぶ階層すらあるらしい。

まったく、製作者は几帳面なのだから変人なのだからないが、目的の層ごとに服装を変える必要があるなど、ところどころに妙なリアリティが重視されているものだから面白い。

あの忘れもしないデスゲーム開始宣告から1年と2カ月が経ち、現在の最前線は60層あたりと聞く。未だに全体の6割と言ったところの攻略ペースでは、あと最低1年以上はこのゲームに束縛されることを示している。

いや、これは希望的観測だ。

この ソードアート・オンライン がシステム面で真つ当な、ある種のお約束を守るゲームであるのだとしたら、さらに連なる30数層あまりの階層の難易度は、当然徐々に上がっていくはずだ。だがそれに反して、未踏破の階層を鷲進とも言える速度で登りつめていった攻略組と呼ばれるプレイヤーたちはせいぜい500人に満たない。ともすれば難易度の上昇に伴ってその速度は落とせざるを得ず、さらに長い年月、オレはこのゲームの虜囚となり続けるのだから。

そうだ。

もう一年以上前のことになるのだ――。

2・回想、そして今に至る

一年以上前、この ソードアート・オンライン 店頭発売に合わせて、オレは人生初の大掛かりな嘘をつき、人生初の徹夜を経験した。

一つ目は友達の家泊まるという家族への嘘。二つ目はゲーム獲得のために秋葉原の店先で野宿したことに因る。

当時13歳だったオレが『ゲームが欲しいから徹夜で並びます！』なんて両親に正面切ってバカ正直に言ったところで認められるはずもない。そう考えたオレは、学校のクラスでまあ、そこそこ親友と呼べる友人に「今日泊めてくれたことにしてくれ」と頼んだというわけだ。

ゲーム機本体であるナーヴギア（ヘルメット状のフルダイブ型シミュレーション端末）自体は、新しモノ好きな父親が入手していたので問題はなかったのだが――、なんとこの ソードアートオンライン というゲーム、初回販売が1万本のみという鬼畜設定になっていたのだ。

そのためにオレは家族にすぐばれるような嘘をつき、11月の寒空の下、秋葉原の街頭で寝ずの番となったわけである。

結局、その甲斐あって無事ゲームを入手したオレは、父親に“無断で”ナーヴギアを借り、部屋着に着替えるのももどかしく、ゲームのインフォメーションに熱中した。

第一項目である生体キャリブレーションでぺたぺたと体のあちこちを触った後、お楽しみのカラクター作成画面に移動したとき、オレは少なからず狂喜したものだ。

当然男性キャラを選び、現実世界ではありえない、恥ずかしいほどに眉目秀麗な（しかもオッドアイ）片手剣戦士を作成し終わると、何か言い知れない感動の渦に苛まれた。

そうやって正式サービス開始までの数日間、学校とキャラを眺め

たりいじつたりを交互に繰り返して過ごしたオレは、正式サービス開始時間に合わせ準備万端ナーヴギアを被り、自室のベッドに横になったというわけだ。

「リンク・スタート！」

フルダイブ型オンラインゲームに没入するための魔法の言葉。^{キワード}

たった7文字の言葉を紡ぐだけで、その先に見知らぬ世界が待っていると思うとオレは心が躍るのを抑えられなかった。数秒の加速感と眼前に現れ点滅する 接続中・・・の文字。

やがてまばゆい光が全身を包み、まぶしさに目を背けながら両の眼を開いた先には、石造りの巨大な西洋の都市が広がっていた。

「うわあ！」

どこか世界史の教科書で見たような17世紀風と思われる西洋の石造りの街並み。背後に見えるあのひとときわ大きい建造物が、スターティング・ガイドブックに書いてあった黒鉄宮だろうか？プレイヤーは犯罪行為（主に各種ハラスメント行為を指す）を行うと、この黒鉄宮に飛ばされるのだという。

また、この ソードアート・オンライン 世界の舞台である、浮遊城 アイン・クラッド は、はじまりの街のある第1層での戦闘でデッドした場合もリポップ場所として、この黒鉄宮前の大広間が指定されているらしい。

さて、さっそく冒険といこうか！

11月はもう冬の季節である。周囲の木々は寒々しいが道端のNPCの音楽隊が奏でるBGMが、サービス開始に賑わうゲーム内を鮮やかに彩っている。

世界初のVRMMORPGとなったこの作品 ソードアート・オンライン（以下SAO）は、それこそ現実世界と遜色ない美麗なグラフィックエンジンを搭載しており、現実とみまごうばかりのリアルさを持っているが、世界すべてを常に精細に表示し続けているわけではない。

このSAOはオートフォーカスシステムが採用されており、プレ

イヤーが任意に注目したオブジェクトに対して自動で精度が上昇し、このリアリティを生み出している。

そんな事を前情報として仕入れていたオレは、街を出る道すら興味を誘われたものを片っ端からフォーカスして歩く。不思議な形の背の高い壺、NPCが売る店頭に並ぶあやしげな食べ物、街角に咲くファンタジーでこぎれいな花々。高精細なポリゴンだけではない、それらにはすべて匂いが設定されており、ナーヴギアを通して匂いを感じることすらできるのだ。

もしかと思って自分の腕の匂いをかいてみたが、そこはやはりゲーム、汗のおいしはなかった。でも自分が臭わないとなると、どんなに手に汗握る体験をしようともゲーム後に風呂に入るのを忘れてしまいそうで嫌な感じがする。

気をつけよう。

自分はベッドに横になったままだけれど、しっかりと汗はかくし喉も渇く、トイレにも行きたくなるだろう。その辺ナーヴギアはどくなっているんだろうか、もしトイレに行きたくなったら自動で落ちてしまうのだろうか。

(ちよつと心配だな・・・)

オレは右の手の人差し指と中指を揃えて軽く振った。指を振るだけでいくつものポップアップが眼前に現れる。これがSAOのメインウィンドウを呼び出すジェスチャーになっているのだ。もう少しで夕食の支度を始めないといけない。とりあえずVR空間は堪能できたし一度落ちよう。

そう思いシステム欄から ログアウト のボタンを探す。

「あれ?…見つからない」

ログアウトなんてシステムの根幹に位置するボタンのはずだ、そんな分かりにくい場所にあるはずがない。しかしどんなに探しても見つからない。それどころかGMコールにも反応がない。

いったいどうなっているんだ。

オレは少なからず焦りを覚えたが、ネットゲームの初日でのトラ

ブルなんて、それこそネットゲームの代名詞とも言える出来事なのでそこまで真剣には考えなかった。

その時点では、だが。

リアル時刻はそろそろ5時半になろうとしていた。

午前1時にオープンしたSAOの仮想空間にもうかれこれ4時間束縛されていることになる。おまけに夕食の準備はできていないし、リアルの身体も心配だ。両親のどちらかが部屋に入ってきたらどうやって言い訳をしよう。

「おい、ログアウトボタンがないんだがお前はどうか？」

「……いや、見つからねえ。一体どうなってるんだろうな、これから用事があるってのに外にメールとか打てないんだっけ？」

「いや、たぶん無理だ。とりあえずGMコールしてるんだが、こっちも反応がない」

「うーん、まいったなあ。世界初のVRMMO！オープン当日いきなりの失態！とか2ちゃんねるで話題になったりして！」

「ぎやはははは！こりゃ歴史の代弁者になれるな！」

「おうさ！とりあえずもうちょい街の外でモンス狩って時間つぶそうぜ？そのうちアナウンスがあんだろ」

街ゆく人たちは一瞬ログアウトのボタンが無いことに動揺したが、大した危機感を抱いていないようだった。かくいうオレもそうだ。そのうち運営アナウンスが流れて、一度大型メンテで締め出しだとか、そんなものだろうと思っていた。

だが、オレの予想は甘かった。

その数分後、世界は一変する。

『これはゲームであって、遊びではない』

製作者茅場の宣言。

オレがこの言葉の真の意味を知ることになるのは、それから1年と少し後のことだった。

顔見知りの商人プレイヤーに今日の狩りで手に入れたアイテムを換金してもらったユウは、33層の転移ポータルから、ホームタウンにしている35層の主街区であるラムトリアの街に降り立った。ゆつくりとした足取りで一階がレストラン、二階以降が宿屋となっている格安ホテル 黄金のうさぎ小屋亭 へと足を向ける。

この階層は職人に好かれるような要素も、さしたるレアモンスターがポップするわけでも、景色がきれいな場所であるとかそんなこともなく、なんとも田舎情緒豊かな中流階級向けの都市なため、ここをホームタウンにしているプレイヤーは少ない。

だが、この 黄金のうさぎ小屋亭 のレストランで出る、露天商よりやや高めの料金設定の料理（主にうさぎモドキの料理なのだが）、が格別に美味いため、ユウはこの街をホームタウンにしている。この事がひとたび噂になったり、最近では各層の旅行案内までしている情報屋に知られれば、このうらびれた、もとい、静かな街はあつという間に人でごった返してしまうだろう。

当然、それはユウも望むところではないため、あの宿の食事のことは誰にも話していない。

まあ…ゲーム開始初期からの腐れ縁であるキスカを除いて、だが――。

そろそろ日も陰り、質素だが雰囲気のある街灯に火が灯り始めた街をのんびりと歩きながら、今日の稼ぎとデュエルの反省点を頭の中で纏める道すがら、一方ではそろそろ装備のメンテが必要だな…などと、ユウは考えていた。

背中に吊った分厚い両刃の剣である ブラウ・ソード は運よく

出会ったレアモンスターがドロップしたそれなりの業物で、32層で手に入れて以降、ずっとユウの愛剣として背中に吊られている。さすがに最近メインで行動する40層付近では、ブラウ・ソード並みの武器はちらほらドロップしているのだが、ユウはなんとなくこの 相棒 を捨てられずにいた。

思い入れのあるものがなかなか捨てられない性分は、リアルでもネットでも変わらない。

そろそろ目的の 黄金のうさぎ小屋亭 が見えてきたところで、入り口横の花壇に一人の少女が座り込んでいるのを見て、ユウはあからさまに顔をしかめた。

座り込んでいた少女がユウに気づき「おい！」と手を振るのが見える。

この少女がゲーム開始時に気まぐれに少しモンスター狩りで助けたことから、付きまとわれることになった腐れ縁、キス力だ。

黄色を基調とした明るい色調のドレスアーマーに、それに反して落ち着いた暗青色のホットパンツという快活な格好。大胆に生足を披露する、常に元気ないでたちの少女キス力は、それほど大きくもない身体のどこからそんな声が出るのかと考えさせられるような、大きな声でユウを呼んだ。

「やーっと来たねー。あと10分来なかったら帰ってたトコだよ！」
「それじゃ10分ぶらぶらしてくるから、さっさとホームに帰ってくれ」

取り付く島もないユウの言葉にもまったく動じず、キス力は言葉を続けた。

「それでね、何で今日来たかっていうと」

「帰ってはくれないわけね…」

「ん？なんか言った？」

「なんでもない…」

「でね、今回来たのはー。久しぶりにココのご飯が食べたかったの

と、ユウを本格的にギルドに誘うことが、団長に認められたからでした！」

パチパチパチと拍手でもしそうな声でキス力が言った。

「…意味がわからん、そりやどういいう見だ？」

「うふふ、知ってるんだから」と、にやにやと猫のような表情でユウを見つめるキス力。さすがにたじろぎ、ユウは後ずさる。

「な、何をだよ？」

感情表現がオーバー気味の表情エンジンが、キス力の頭に豆電球を光らせたようなしたり顔で良くぞ聞いてくれましたとばかりに、大きな瞳を細めて言った。

「今日の夕方、ユウってば。ドラクラのシルフェンドさんをデュエルでぶっ倒したでしょ?! しかも圧倒的な感じで!」

「圧倒的じゃないし! それに何で知ってるんだよ!」

フツフツと怪しげな笑いとともにメガネをずり上げるようなしぐさ(当然メガネなど掛けていない)で目をキラキラと輝かせながらふんぞり返るキス力。

「私の情報網を甘く見られたら困るわー」

「どうせまたあいつらだろ? ネズミの野郎め!」

ネズミとはキス力が鼻屑にしている情報屋集団で、聞き耳スキルやら追跡スキルやら戦闘にまったく関係ないスキルばかり修練し、ただただ他人の情報が知りたいという欲望に特化した連中の総称である。

「まあまあ。でも今回のオファーはマジだよ! うちの団長もノリノリなんだから」

「そんなこと言われても、オレはギルドなんていやだよ。制約とかノルマとか苦手だし、やりこみたいときにソロできないし。なんだかんだ言って、毎回誰かに付きまとわれるのは真っ平ごめんだ」

心底嫌そうな顔をしてみせるユウに対し、まったく気後れしないキス力は、

「入ってみたら分かるって、楽しいよ? そんなことよりお腹空いち

やった、ごはんにしょーよ！」

なんてのたまって見せる。そんなキス力のマイペースさに辟易しながらも、ユウはシックで分厚い木の扉をくぐり、黄金のうさぎ小屋亭の中にキス力と連れ立って赴いた。

ボックス席ではなく、あえてカウンターに座ったユウとキス力はシェフのNPCに各々にメニューを告げる。

このゲームで現実と違うところといえば、トイレに行く必要がないことと、頼んだ料理が瞬時に到着することだろうか。

尿意や便意がないのは便利だが、現実の身体はそうはいかないはずだ。自分たちが今どんな状況におかれているのかは、正直想像したくない。

目の前に並べられた数々の料理に舌鼓を打ちつつ、キス力はさっきの話を続きを暢気な声で話し始めた。

「そうそう、そんなわけで明日入隊試験だからよろしくね」

「はあ?!」

「だからー、入隊試験だよ」もぐもぐとうさぎモドキのステーキを頬張るキス力。しゃべりながらもフォークとナイフは止まることなく動いている。

「明日48層の迷宮区をクリアするの。もう踏破済みダンジョンだからサクサクいくけど、ユウの実力を知りたいって団長がうるさくてね。それなら一緒にパーティ組んでみようってことになったの。まあもう内々定って感じだから、よっぽどへボじゃない限り入隊させないってことはないんだけどね」

ユウはすっかり呆れてしまった。キス力は前々から自己中心的なところがあったが、よもやこんなことになるとは。それに差し迫った問題もある。

「っていうか、48層ってオレのレベルだとマージンきつくないか？」

そうなのだ。

キス力の所属するギルド GREEN NOAH は末端とはい

え腐っても攻略組。ハイレベルのプレイヤーにそれを裏付ける一般からはかけ離れた高価な装備類を所持するトッププレイヤー集団だ。当然キスカもこう見えて、ユウより10はレベルが上のはずだ。

「そこは気合で何とかしてよ、11連勝のナゾの剣士さん？」

辟易するユウにいたずらっぽくキスカは笑いかけた。

そして気づいたようにじろじろとユウを眺めると、

「…それにしても、食事中でも鎧、脱がないのね」

いつものように小言がはじまった。

「ああ、なんか脱ぐと落ち着かないんだ」

「ふうん…まあいいけど、ダサいのは昔からだし」

実用性重視で見た目にまったく気を使っていないユウの格好はさしずめドン・キホーテといったところか。胸元だけ不釣り合いに角ばったアーマーをつけ、そのくせそのほかは皮製布製主体の軽装鎧ときている。長い髪は後ろで無造作に束ねられ、一見して磨けば美男子美少女の域に達しようものののに、本人にはその自覚がまったく無い。

「まあいいわ、うちのギルドに入ったら思いっきり改造してやるんだから」

「はあ、お手柔らかに…」

がぶりとうさぎモドキのステーキを頬張るキスカの横でユウはため息をついた。

結局キスカ強引な折衝に反抗できるはずもなく、明くる明日、ユウはほぼ一年ぶりの死亡マージンを冒した危険域での戦闘をするようになったのだった。

3・戦闘マージン

戦闘マージン。

それはこのゲームがデスゲームであることから来る死にたくない、でも100層ある階層をクリアしなければゲームから出ることは叶わない、ならばどうすれば良いのか……という点から生まれた一つの方法論である。

このゲームではゲーム内のデッドが現実の死に繋がる（少なくとも茅場晶彦はそう言っていた）のだからプレイヤーもそれ相応の対処をするというものだ。それが戦闘マージンといわれる戦闘知識である。

このゲームは基本的に階層「レベル」というお約束に忠実な作りになっているため、プレイヤー達は大体本来のレベル - 20レベルを挑む階層として割り当てている。

20レベルもマージンがあれば、相当な事故がない限り正直言って死なない。どんな下手くそでも死ぬことは無い。危険なときは緊急脱出用の転移結晶もある。だが、こういった知識が定着するまでにプレイヤー達は多大な犠牲を強いられたのは言うまでもない。

もし仮にモンスターとの戦闘や、あまりないがPK行為によってデッドした場合、第一層の黒鉄宮の真つ黒な石碑に刻まれた名前に線が入られ、横に死亡要因が書かれることになる。

そして皮肉なことに、このゲームでの最初の死亡者は、モンスターによる死亡でも悪辣なプレイヤーによるPK行為が原因でもなかった。

このゲーム ソードアート・オンライン の生みの親にして、1万人のプレイヤーをゲームの虜囚とした、天才ゲームデザイナー茅場晶彦のデスゲーム宣言から数時間後。

ログアウト不可に伴う狂乱に満ちた第一層主街区では、絶望するもの、泣き崩れるもの、妙にハイになって声を上げるもの、みな三

者三様の対応をしていた。

そんな中で一人のプレイヤーが閃いた。

このアイン・クラッドから飛び降りればログアウトできるのではないか？ と。

そう思いついた一人のプレイヤーは周りが止めるのを押し切って第一層外周をめぐる落下防止用の柵をよじ登り、空中に身を躍らせた。

絶叫とも言うべき声が長く尾を引き、それから約2分後、黒鉄宮の石版のそのプレイヤーのプレイヤー名に死亡を示す線が引かれた。

死亡原因：高所落下

彼のプレイヤーが死の宣告をされるまでの約二分間、いったいどんな経験をしたのかは、正直想像したくない。

とにかくこの事例でこのゲームは真偽はともあれ、死亡するトリトライができないのだとプレイヤー達は理解した。現実にはナールグアのマイクロウェーブ波によって脳が電子レンジでチンされたかどうかは、ゲーム内のプレイヤーには知る術が無かったからだ。

そして。

一ヶ月で2000人が命を落とした。

原因としては慣れないモンスターとの戦闘やら自殺によるものだが、この有りようは全プレイヤー達を恐怖させた。これはクリア不可能なゲームなのではないのかと。

だが、十分な情報がプレイヤー達の間でいきわたるようになり始めると、モンスターがさほど危険な存在ではないということが次第に理解され始め、死亡率は減少し、安定期を迎えることとなる。

とはいっても、突発的な事故やPK行為で死亡するプレイヤーが0になることはなく――。

（犯罪プレイヤーは推定で1000人いるといわれている）

現在の生存者数6000名強、それが現在のアイン・クラッドの

実情だった。

昨晚、黄金のうさぎ小屋亭 でキス力を見送った後、3階奥の部屋を借りてベッドで眠りこけていたユウは、自分が設定した起床アラーム（プレイヤーが任意に設定できる）の伸びやかな管楽器の音で目を覚ました。

目を覚ませばそこは自室のベッドで、朝ごはんを作る音と学校に遅刻する旨を声を張り上げて言う母親の声が聞こえるのではないか、という幻想は今回もまた崩れ去った。

見えるのは質素なワンルームのベッドに横たわる自分と木製の天井。

ユウはゆっくりと起き上がると、昨日キス力に言われて決められていた集合時間までまだ30分ほどあることを確認して、右手人差し指と中指をそろえて軽く振り、装備の点検を始めた。システムに規定された何層ものポップアップが視界の中に発生する。

このゲームはネットゲーマーの不精を推進するかのように、汗などでキャラクターが汚れることはないので風呂に入る必要が無い。好んで毎日入浴するプレイヤーも中には居るが、さすがに液体を完全に再現することはナーヴギアでも難しいのか、あまり評判は良くないようだ。

言ってみればユウは不精なプレイヤーのひとりである。どんなに寝姿が悪くても寝癖がつかないこのゲームシステムには心底助かっている。

「転移クリスタルよし、回復クリスタルよし、解毒クリスタルよし、回復POTが心もとないが、行きすがてらにでも買い揃えよう」

一通り点検を済ませると、寝巻き代わりのラフな服装からいつもの甲冑姿に装備フィギュアを操作する。最後に背中に愛剣 ブラウ・ソード を吊り下げ、ユウは宿屋をあとにした。

「転移、リンダース！」

まばゆい光に包まれて、身体がふつと軽くなる感覚が一瞬。

閉じた瞳を開くと、そこはすでに草原が広がる広大な土地、遠くにイタリアによく似た尖塔の立ち並ぶ瀟洒な街並みが広がっていた。48層の主街区であるリンダースに降り立ったユウは、目にまぶしい黄色いいでたちのキスカと、一見して高レベルと思しき4人ほどの集団と相對した。

彼らがキスカの言う GREEN NOAH の面々だろう。

「はじめまして。ユウ、ソロです。今日はよろしくお願いします」

半ば強引にギルド入りさせられるとはいえ、最低限の礼節を心がけようと思ったユウは、がらにも無く一礼して見せた。それに応えるように集団の中から、片手剣士の長身でガタイの良い男が一步前に歩み出した。

「君が、あのユウくんか。そんなに畏まらなくていい。楽に行こう。俺の名はオルグ、一応このギルドのマスターってことになってる片手剣士だ。こちらこそよろしく」

すつと手を出されたので、ユウはその手を握り返した。

「そうか、分かった。そうする」

ギルドマスターのオルグが楽に行こう、といった途端、さっきまでの殊勝な姿勢はどこに行ったのか、尊大な態度でユウは対応した。ユウは初対面であっても基本的に物怖じすることは無い。小柄で華奢に見えるユウにとって、なめられるとろくなことが無いという経験をここ1年で得たからだった。

「ハッハ、こいつ面白いヤツだな！キスカ！」

「そうでしょ？絶対いい仲間になれると思うの！」

「そうだな、こんなに活きのいいやつは久しぶりだしな、まあお前以来という意味だが！」

「どういうことですか、団長？」

「おっと失言」

おどけてみせるオルグに周囲のプレイヤーたちから笑いが漏れる。

「俺は槍使いのカーディナル、よろしくな」

「名前が長いからカーくんでもいいからね！」とのたまうキス力に「こら、勝手なことを言うんじゃない！」とばかりと頭を小突くカーディナル。はたかれても関係ないといった風体でキス力は紹介を続けた。

「んで、こっちの斧使いの人がゲンノジさんで、こっちの美人のおねーさんがマミヤさん。槍使いだよ」

「よろしく」「よろしくね、ユウさん」

各人挨拶と握手を交わすと、オルグが「まあ、この人数で全員だ少ないと感じるかもしれないが、これくらいのほうがフットワークが軽くていいもんでね」とメンバーに視線を巡らせながら言った。

「それにみなさん、高レベルのようですしね」

「まあな」とオルグはさらっと肯定する。

「でも、こんなレベルの高いギルドにオレなんかが入っていいんですか？レベルも10は下ですよ？」

「ああ、レベルのことは心配要らないよ。ようは君がどれだけ使えるか、が見ただけだからね。時間も勿体無いしそろそろ出発するぞ、いいか？」

「……おー」「……」当然のようにギルドの面々が唱和した。

で、実際の戦闘ときたら、これは完全な接待プレイだった。

モンスターの集団に襲われても、ギルドメンバーたちは一匹を残して敵を殲滅すると、1on1でモンスターをユウに攻撃させた。

初めて見る敵ばかりだったので最初は動揺したユウも、ギルドマスターオルグの的確なアドバイスを水を吸うスポンジのごとく吸収して、すばやく対応し、倒していった。

SAOは単純に言って、与えたダメージの比率によって取得経験

値が上下する。一匹のモンスターに対して、しかもこの階層で接待プレイを受けるのだから、その経験値もかなりのものだ。経験値のバーがぐんぐんと上昇する。

ギルドメンバーがこんなにも良くしてくれているのだからと、ユウもでき得る限りすべての手を晒す勢いでスキルを使い続けた。体術と剣術の融合系ともいえる戦いをするユウにギルドメンバーは興味津々のようだったが、それよりも数撃のもとに敵を切り伏せていくギルドメンバーたちの技量とパラメータにユウは嫉妬半分驚嘆半分といったところだった。

「せい！はあっ！せいやつ！」

片手剣ソードスキルで切り込んでからの、体移動。そして隙を埋める体術スキルにさらに連動するソードスキル。息をもつかせぬ連撃と軽い身のこなしがユウの最大の持ち味である。それを遺憾なく披露してみせた。

と、そうこうしているうちにレベルが1上がってしまった。

「ここで小休止といこう」

オルグの号令を聞いて、ダンジョン内に設けられた安全地帯に到着したギルドメンバーは、各々腰を下ろして体を休めた。いつても筋肉が疲れるということはありません、これは所詮ゲームだ。問題は精神のほうにある。

敵モンスターとの戦闘は、否応なしに精神力を消耗するため、こういった小休止は必ず必要になってくるのだ。

オルグのマップによるとちょうどダンジョンの中盤まで到達したようだった。

「いい感じだね、ユウの字。ちょっとトリッキーで合わせにくいかなと思ったけど、予想以上にバリエーションがあって、合わせやすかったよ」

と、カーディナルが言い、そうね、とマミヤが続く。

「キテレツに見えてちゃんと考えられた動きだからかしら、そんなに不安は感じないわ」

オルグや寡黙らしいゲンノジも同意見のようだ。

「だが気をつけるよ？この49層へと繋がるダンジョンは、所々にクリスタル無効化空間があるからな。気を引き締めていこう」

「そうね」「そうだな」「うむ」「おー」「わかった」

各々返事をするとう立ち上がり、残り半分の攻略へとパーティは歩みだした。

4・策謀のダンジョン

先ほどと同様、集団で来るモンスターを蹴散らし、1on1でユウが戦う。この接待プレイを続けながら、ただしなるだけゆつくりとパーティは前進していった。まるでポップする敵すべてと戦うようなプレイスタイルだ。そんなことをしていれば当然膨大な経験値がユウに注がれることになり、あっという間にユウはさらにレベルが1上がった。パーティの癖も大体つかめてきたユウは、ギルドメンバーとのスイッチを織り交ぜたりして、だいぶ打ち解けてきたと思っただけにそれは起こった。

「何だ？」

ちょうどパーティは迷宮区を練り歩くようにして、袋小路に入り、奥に溜まっていたモンスターを撃破したところだったが、それはパーティを先導するために先頭を歩くオルグの疑問から始まった。

「どうしたんですか？団長」とキスカが聞く。

「いや、この十字路のこの道以外から3人のプレイヤーがいつせいに走ってきている、しかも隠密性のかなり高いマントを羽織っているようだ」

索敵レベルのさほど高くないユウには分からなかったが、さすがギルドマスターといったところか、走ってくるプレイヤーを看破した。

「どうします？でも後ろは袋小路だし…」

「ああ、だが…これは！」

「どうしたの？オルグ」

「全方位から…敵が！数は40以上！」

「まさかトレインMPK？！」その意味をいち早く理解したマミヤが声を荒らげた。

そういえば、最近新手のMPK集団が現れていて、被害が出ているという噂をユウは聞きかじっていたことを思い出した。その方法

というのが実に単純なもので、隠密性の高い装備を身に纏い、出会ったモンスターに片っ端からF.Aを仕掛け、他のパーティプレイヤーにぶつけると、自分は転移結晶でとんずらするという物だ。如何に連携のとれたプレイヤー集団であっても、大量のモンスターを一度にあてがわれては、パーティの混乱は必至であり、その恐怖に転移結晶を使うこともままならず、少なくとも被害が出ている、という話だ。本来はゲーム上ではありえないが、背をつめたい汗が一筋流れたのをユウは確かに感じた。

「ザッ！ザッ！ザッ！」と黒い影が十字路の中心に躍り出る。しかしユウは見てしまった、その中の一人が口を狂ったように歪め、白い歯を見せているのを。

（…笑ってる?!）

ユウの心を過ぎったのは、怒りや憎しみではなく、何故？という疑問符だった。他人を進んで苦しめる人間の心理を基本的にユウは理解出来ない。ましてや殺人を目的とした行動など、理解の範疇を超えている。このゲームは、プレイヤーが一丸となってプレイしなければクリアは難しい。だというのに、彼らオレンジプレイヤーたちは何故その調和に抗うのか。あまり喜ばしいことでは無いが、プレイヤーの死に出会わなかったプレイヤーなどこのゲームにおいてほとんど存在しないはずであり、その苦しみや悲しみは死体の残らないゲームだからこそ希薄でありながら、尊守されるべき事柄であるはずなのだ。

「…転移、リンドース！…」

黒ずくめの三人が唱和する、青い光に包まれて男かも女かも分からない三人組は十字路の交差点で姿を消した。と同時に、大量のモンスターたちが十字路に殺到する。目標を失ったモンスターたちは一瞬停止するも、すぐに新たな獲物を見つけたといわんばかりに、瞳をぎらつかせ、十字路のモンスターに敷き詰められていない一本、ユウたちの居る袋小路に雪崩れ込んできた。

「まずい！各自転移クリスタルを！」

言われユウもすかさずポケットから転移クリスタルを取り出した。しかし、普段なら青淡く輝いているはずの六角柱の転移クリスタルは輝いておらず、鈍い色をした石ころに成り果ててしまっていた。

「だめ！クリスタルが反応しない！」

「クリスタル無効化空間か！」

マミヤの悲痛な叫びとオルグの焦った声、ユウはここに来て初めて、死の恐怖に苛まれていた。

死ぬかもしれない、如何にこのギルドメンバーが強くても40体を超えるモンスターの相手などではしまい。

ここで、死ぬのだろうか――。

こんな中層の、しかも腕試しで来たような場所で“死ね”というのか。

（それは、嫌だ――！）

ユウは背に吊った ブラウ・ソード の柄に手を添え、これから起こるであろう惨劇に覚悟を決めたが、膝の震えは収まることはなかった。

「嵌められたな」寡黙なゲンノジが呟く。

「そのようだな……しかたない。全員抜刀！左を切り崩して十字路を出るぞ！」

オルグの号令にパーティの皆が一丸となって、モンスターの層の比較的薄い通路左側に突撃した。しかし多勢に無勢、敵の攻撃を切り払い、受け流しするも、あまりの敵の多さに反撃をするいとまが無い。徐々に削れていくヒットポイント、そんな中果敢に敵に切り込んだ斧使いのゲンノジが、大技を繰り出して数体の敵を吹き飛ばした。だがそのデレイトイムを突かれて、敵の一撃をもろに受けてしまう。ぐぐつと下がるヒットポイント。HPバーは危険域の黄色から死を予感させるレッドゾーンへ。

「ゲンノジ、下がれ！スイッチ！」

オルグが間一髪のところまで盾を強引に割り込ませる。

「やらせねえぞ！やらせはしねええ！」

敵の攻撃をしのぐオルグの横を守るかのように、カーディナルが槍を薙ぐ。高レベル槍スキルで広範囲にダメージを与え、敵の進撃を怯ませる。

「スイッチ！」

そこに半狂乱になりながらもユウが飛び込んで、カーディナルの大技のスキルディレイに身体を躍らせた。愛剣 ブラウ・ソードを斜めに走らせ、今カーディナルを斬りつけんとするモンスターの腕を勢い一閃切り飛ばす。

ユウはさらに近づくと、くるりと身をひねり、中級体術技 ターン・ドライブ 後ろ回し蹴りで敵の集団にモンスターを吹き飛ばした。

「はああああ！」その吹き飛ばした敵に止めをさすべく、マミヤが目にも留まらぬ連続突きを見舞う。その横から飛び掛る敵を、キスカが棍で打ち払った。

「甘いつてえの！」

さすがは攻略組の一端、鍊度もさすがと言える。だが徐々に削れていくヒットポイントは回復POTを飲んでも追いつくことは無く、それどころか新たに飲みなおす余裕すらない。

そうこうしているうちに、退路であったはずの通路左側は敵で溢れ、壁を背にして敵に完全に包囲されてしまった。グルル…という獣特有のうなり声を上げながら、どう食事してやろうかと、モンスターたちは舌なめずりをしながらじりじりと、その間合いを詰めていく。

「みんな！」

オルグが声を上げた。

「すまん！」

その一言でユウを除くパーティのメンバーには十分だった。

戦って、戦って、戦い抜こうと、飛び掛る敵に必死の剣戟を見舞うパーティのメンバーたち。しかし各々ヒットポイントの多少はあれど、皆レッドゾーンに突入している。

なんとかしろよ！なんとかしろよ！とユウはそれだけを頭の中で繰り返し念じていた。それを示すかのように剣を振り拳をつきたて、その行為で自分を宥めようとさえしていた。

絶望。

死の予感。

ひたひたと這い寄るそれに対し、しかしユウを除いた4人は常に冷静だった。ここで倒れてもいい、だが倒れるならこそ前のめり、とでも言うかのように気合に満ち満ちた表情で、敵と最後まで戦い抗うと決めた姿がそこにあった。

震える手に鞭を打つユウと違い、オルグたち GREEN NOAH の面々はまさに闘神のごとくであった。死線の違い、それこそがまるで現存する6000名強の中のトッププレイヤーとしての矜持であるかのように。

「何か、来る！」

そう叫んだのは後ろに下がり身体を休めていたゲンノジだった。十字路の左から猛スピードで飛び込んでくるプレイヤーが一人。ユウの索敵範囲にも現れたそれは、尋常ではない速度でこちらに向かってきていた。

「全員、スイッチしろ！」

女の声だ、怒号のようなそれを聴き、パーティ全員が強攻撃を打ち放つと、すばやくバックステップし、敵から距離を取る。

「はああああああ、セイヤツ！」

だが次の瞬間見た現象はまさに常軌を逸していた。

着物姿の妙齢の女が一人、俊敏値の限界まで加速した状態から、十字路にぎゅうぎゅうに敷き詰められたモンスターハウスに、飛び蹴りを見舞ったのだ。

ズガー——ン！

まるで建築物解体用の鉄球がさらぴんのビルにぶち当たるかのような轟音。

黄色のライトエフェクトに包まれた女の飛び蹴り一発で、十字路に居た敵の20、いやそれ以上が、まるでボーリングのピンのようにはじけ飛ぶ。

まさに一騎当千。一撃で女は退路を開いてしまったのだ。

「――はあ？」

愕然とし声を上げるキス力。

「ぼーっとするな！急げ！」

着崩れた着物姿を直しつつ言う女の声に急かされ、ほうほうの体でパーティメンバーは十字路を左に折れる。と同時にクリスタルに輝きが戻った。

「今のうちだ、ヒールクリスタルを！回復したら加勢するぞ！」

オルグの声に皆うなずくと、回復結晶を手にはヒール！と唱えた。一瞬にしてHPバーが右端へと移動し、フルを示すグリーンになる。態勢を立て直したパーティメンバーは、着物姿の女を振り返った。だがどうすればいいのか、着物女は魔物30数体を相手取り、まったく怯んでいない。それどころかHPバーは未だフルであるグリーンのまま。いや、正確には僅かだがダメージを受けている。だが10秒もしないうちにバーが右へとぐぐつと戻ってしまうのだ。

「――バトルヒーリング！」

オルグが唸った。

「バトルヒーリングって…でもあれは事実上修練不可能なスキルじゃない！」

「いや、一部の高レベルプレイヤーはその範疇にない。俺たちはそのレベルには達していないけどな…」

マミヤの問いにカーディナルが押し殺した声で答える。

今目の前で繰り広げられているのは別次元の戦い。雨あられと降り注ぐ敵の襲撃をかわし、いなしては投げ飛ばす。

グギョエエエエエエ！

トカゲ頭の片手剣士の胸に無手の腕を深々と突き刺した謎の女は、その姿勢のまま殺到する敵に蹴りを見舞い、その反動を生かしてト

カゲ頭を投げ飛ばした。

その女は実に奇妙だった。

着物姿のほかに武器は持たず、防具といえは手の甲を守るための赤い武者鎧のような籠手のみ。その籠手で敵の剣戟を受け流し、一息と共にダンジョンの壁へと投げ飛ばすと、面白いようにモンスターの半ばほどあったヒットポイントが吹き飛び、ガラス片へと粉砕される。またあるいは突き出された敵の腕を取り、一瞬のうちに組み伏せる。関節技の持続ダメージでモンスターのヒットポイントが、がくりがくりと削られていく――。

まさに体術の極みともいえるその戦いを目の前にして、ユウたちパーティのメンバーは一言も声を出せずにいた。

一匹、また一匹と敵が排除されていくに従って、その女の異様とも言つべき姿が良く見えるようになってくる。

一目で最高級オーダーメイド品と分かる色留袖の流麗な着物を自然に着こなした女は、ふっと視線をユウに移す。切れ長の美しい顔立ち。

ユウはこの瞬間、言い知れない一種の興奮を覚えた。

まさに自分が目指す完成形が、今この瞬間、目の前にいるように思えたのだ。止むことのない体術と体さばき、無駄の一切を排除された一連の動作。剛の技、柔の技、どこを取っても一流と言わざるを得ない。スキル熟練度もかなりのものと思われるが、それ以上にブレイヤースキルという点で、ユウたちパーティメンバーを数段上回っていた。

モンスターの勢いが豪雨であるならば、こちらは暴風。

暴れまわる台風の中心は常に凪いでおり、女の顔には焦りの表情も怒りの表情も見いだせない。完全なる無。ただそこに敵がいるから排除する。さも当然のことのように、無駄のない、ともすれば緩やかに見える動きで、敵を圧倒していく。

「スイッチ。後は任せた」

と、女が突然すばやく身を引いた。矢面に立たされたパーティーメンバーは泡を食ったが、修羅場くぐりも流石といったところで、難なく5体の敵を倒すと（といっても敵のHPは揃いも揃ってすでにレッドゾーンだったが）、この奇妙な着物姿の女性にユウたちは向き直る。

女はぱきぱきと肩をならすと、懷から煙管を出して口に咥えていた。

パーティーの中でオルグが一步前に歩み出る。

「本当に助かりました、貴女が来てくれなかったら私達は全滅——」
と、着物姿の女は手を前にかざし、オルグの言を止めさせた。

「この犯人を見たか？」

女の凜とした声、有無を言わせぬ質問にユウは知らず声をあげていた。

「見ました。3人とも黒ずくめで、フードを被っていたので顔はわからなかったけれど……」

女は腕を組むと、ふむと唸った。

「そうか、ならいい」

踵を返そうとする着物女に慌てたようにマミヤが続ける。

「ま、待って下さい！せめてお礼だけでも！」

「いらない、感謝の言葉も不要だ。何故ならこれは仕事だからな」

「仕…事？」

着物女が初めて表情らしい表情を見せた。といっても、唇の端をつりあげる卑屈な表情であつたが。

「そう、軍から降りてきた討伐命令」

「討伐命令って…まさか貴女は賞金稼ぎなのですか？！」

「賞金稼ぎって、なに？」

ユウはキス力に耳うちして聞いた。それを聴いたキス力は心底驚いたように目を見開いて、

「ユウ知らないの？金を積みばレアアイテム収集から人殺しまでなんでもこなすあらくれ者の集団のことよ！この前もあつたでしょ、

犯罪ギルド トーチャーオブブラッドバンド（血の池地獄） の討伐の時も選りすぐりの賞金稼ぎが何人も宛がわれて、TOBPの半数以上を黒鉄宮の牢獄に放り込んだって話！まあ、残りの半分は殺されたって話だけど…」

と、恐れを抱くような声でユウに説明した。

「あー、なんか風の噂で聞いたような。ごめん、オレ、ボリウムゾーンの普通のプレイヤーの一人だから…そういうことはあんまり知らないんだ、新聞も読まないし…」

新聞と言っても情報屋集団が毎日発行している両面刷り4枚に満たない情報誌のことだ。そこを読めば、今SAO内で何が起きているかのあらましくらいは理解できる。

だがマイホームも持っていない宿屋暮らしの貧乏プレイヤーのユウにはそんなものに割く金銭的な余裕はない。

「まあ、そういうことだ。私達に関わっても面白いことが無いのは、そちらも承知しているだろう？…それでは失礼する」

目礼すると着物女はゆっくりとした足取りでユウたちパーティから離れていった。

しかし優雅ないでたちでありながら、その後ろ姿は孤独を孕んでいるようにユウには思えてならなかった。

5・GREEN NOAH

「なーんか、感じ悪いよね。あの人！」

ガチャガチャとドロップアイテムをポーチから取り出してテーブルに広げながら、キスカが先程の着物女について、愚痴をこぼした。あの後、なるべく急いでダンジョンを脱出し、49層に降り立ったユウたちパーティメンバーは、パーティリーダーのオルグを除いて、近場の宿屋でドロップアイテムの整理をしていた。オルグは例のトレインMPKの件を第一層の軍に報告に行っているから不在だ。

皆の顔に笑顔が無いことから大したアイテムはドロップしなかったのだろう。とは言っても、それはハイレベルプレイヤーの目線からの話だ。もしかしたらユウにとってはお宝に相当するものがあるかもしれない。

それに実際問題死にかけたのだ、精神的な疲労はかなりのものがあるだろう。そういつた背景があつて、このメンバーの空気はあまり良くない。傍若無人なキスカと妙に浮かれ調子のユウを除けば、みな表情に疲労の色が見える。

「それにしてもあの着物の人、誰だったんだろう。名前も聞けなかった」

「なによ、ユウ。あんな感じのわっするーい女のことか気になるの？ しかもオバサンじゃん！ つて、もしかしてユウってば年増好き？」

「ばか」

「わかってるよ——まったく、ユウの強いもの好きには恐れ入るよね。ドラクラのシルフェンドの次は賞金稼ぎの武道家ってわけ？」

「いや、だってあんな強い人初めて見たんだぜ？ 本当に別次元の強さだった。絶対名前を割り出して、いつか勝負を挑んでやる」

「——悪いことは言わないから、やめておきなさい」

椅子を蹴って意気込むユウを意外にもママミヤが嗜めた。

「賞金稼ぎっていう連中はオレンジプレイヤーではないけれど、目的のためなら手段を選ばない狡猾で獰猛な連中よ」

ボックス席で腕を組んでいたマミヤが厳しい表情でユウに視線を向けてよこした。

「悪いけど、今のあなたじゃ勝てる見込みはゼロね。それ以前に勝負を受けてくれるとも思わない。——連中はお金にしか興味が無いの。名誉とか羨望とか、お金に換算できないことに関しては剣の一振りもしてくれないでしょうね……」

「どういうことですか？マミヤさん」

「彼らは必ずしもゲームクリアを目指してるプレイヤーではないってこと。守銭奴なのよ、まあ中には攻略組に名を連ねている人も居るだろうけど、少数派だと思う」

それに、ただ勝負して負けたとしてそれだけで済むはずが無い、と手を組んでうつむくマミヤ。攻略組と賞金稼ぎには、一言では片付けられない深い溝があるのだとユウは感じた。

「でも、あの人は違う。きっと、オレ……あの人と勝負すればわかる気がするんだ」

「……私は一応止めたからね」

ユウの熱弁にマミヤは呆れたように肩をすくめた。

「ユウはいつもこうなんです、マミヤ姐さん。いつか絶対痛い目見る」

と、キスカが息巻いたところで、黒鉄宮から帰ってきたオルグが宿屋のドアを開けて入ってきた。それに気づいたメンバーが手を振り、宿屋一階レストランのボックス席にオルグを招き入れる。

「どうだったよ？団長」

カーディナルがオルグに問うと、

「ああ、どうやらあの女性の言っていたことは本当のようだ」

席に着いたオルグは、神妙な表情で語り始めた。

「ここ数週間でマージンを取った迷宮区行軍で死亡認定されたのが24名。……これは従来でいえば異常な数らしいんだが、その何件か

がクリスタル無効空間を悪用したと思われるM P Kの可能性が疑われている。これを受けて、アイン・クラッド解放軍は本格的に捜査に乗り出したんだが、その方法がまさに力技でな、人員の約4割を動員して、クリスタル無効空間のある40層以下のダンジョンすべてに監査員を投入したってわけだ。そこで運よくM P K集団のひとりと目されるプレイヤーを捕縛することに成功したらしい。尋問の結果Corps Pilgrimageとかいうギルド名とギルドマスターの通り名までは割り出せたんだが…、如何せんアジトに突入する直前で感づかれて、あとは良いように煙に巻かれているというわけだ」

オルグのために取っておいたすっかり冷めてしまったコーヒーをオルグは一口すすり、肩をすくめた。

「業を煮やした軍上層部は件の犯罪ギルドとそのギルドマスターに200万コルの賞金を掛け、賞金稼ぎが乗り出してきた、というのが今回の全貌。ちなみにアジトを割り出されてからの奴らは、余程頭にきたのかM P Kの回数を増やしているらしくてな、第一層の黒鉄宮の石板には、続々と死亡者が刻まれていつてる」

「危うく俺たちもその仲間入りをするとところだったってわけか」

「そういうわけだ」

「本当に危ないところだったわよね…」

「うむ」

マミヤの言にゲンノジが同意する。

「これもユウをパーティに入れていたおかげだね！」

とキス力が威勢よく自分の膝を叩いた。

「よしてくれ、キス力。オレは結局何にもできてないんだから」

「とんでもないぞ、ユウくん。君が居なかったら、もっと早くパーティから被害が出て崩壊していただろうし、今回のように運よく賞金稼ぎに救われることもなかっただろう。一緒に死線を潜った仲間としてすぐにもギルド入りしてもらいたいぐらいだよ」

神妙な顔でそう返され、ユウは気恥ずかしさに身じろぎした。

「それで、どうする？」

キス力が切り出した。ユウにギルド入りするかどうか問うたのだ。その言葉にユウはなるべく言葉を選んで音を紡いだ。

「まだ、何とも言えない」うつむいていた顔をあげると、キス力、オルグそしてギルドメンバー全員に順に視線を移していく。

「もう少し待っててくれない、かな」キス力、それにみんな。オレあの女の人とデュエルして確かめたいことがあるんだ。あの人の目は金に目がくらんだただの賞金稼ぎって感じじゃない。それにあの技術、少しでも盗みたいし……」

「どーせ最後のが本音でしょ」

ふいつと横を向いてふくれっ面のキス力が言う。

「……」

間の悪い沈黙が流れる。そこを打ち破るようにオルグがよし！と膝を叩いた。

「まあ、上昇志向があるのはいいことだ！残念だかこの件は保留ってことで。いいな？みんな、……わかるな、キス力！」

「……わかった」しょんぼりとした態度でキス力が頷いた。

「すみません」

「君に謝られたら困る」

このギルドは本当に良いメンバーがそろっているとユウは思った。仲間思いのカーディナル、寡黙ながらも冷静沈着なゲンノジ、我が強いが故に相手を思い遣る気持ちも強いマミヤ、天真爛漫を絵に描いたようなキス力、そしてみなを深い懷で温かくまとめるオルグ。こんなギルドに入れたらどんなに幸せだろう。

だが、いや、だからこそ今の自分ではギルドに入るに値しない。何よりも強さがすべてを支配するこの ソードアート・オンラインに於いて、ユウはあまりにも非力だ。せめてあと10レベル、彼らと肩を並べられるような強さをユウは何よりもまず欲していた。

「悪いな、キス力」

「もーいいよ。それであの女の捜すあてなんて、どうせないんでし

よう」

「そうだな、地道に探してみるつもりだけど……」

「んもーあんたってヤツは手が掛かるんだか鈍感なんだか！」

「ど、どうということだよ！」

「わたしが、探してやるって言ってるのよ！」

「……お、お前が?!」

「そう、わたしが」

ホントかよ、とあからさまに疑わしげな視線を投げかけるユウに、はつはと笑うオルグは、「まあキス力を信じるんだな、ユウくん。これから俺たちはホームがある50層主街区、アルゲードに戻るからついて来るといい。目的の場所もそこにある」

「え、っていうことはユウくんも私たちのホームに？」何故か表情の曇るマミヤ。

「そういうことになるな」

「まあゴミ溜めだけだよ、気軽にこいや」というカーディナルに「散らかってるのは、主にアンタのせいでしょうが！」毎回毎回、謎なアイテムを買ってきちゃホームにほっぽっておくんだから、片付きやしない！とマミヤがカーディナルを睨みつけて言う。

「へっへー怒られてやんの」

「アンタもよ！」

と調子に乗るキス力をマミヤが容赦なくはたく。

「あいたっ、暴力反対！」

「はいはいそこまでだ二人とも、さあアイテムをしまつてホームに戻るぞ！」

各々が席を立つと、宿屋を出て49層主街区の転移門へと歩き出した。オルグを待っていた間にした軽食の分の費用は、店を出た瞬間きつちり財布から抜かれている。余談だが、このゲームは基本的に喰い逃げができないシステムになっているのだ。

「転移、アルゲード！」

実はユウは40層付近での活動が主だったので、50層なんてい

う高層には行ったことがなかった。この転移の先にどんな街が待っているのか、48層のリンダース、そして49層の荘厳な街づくりに感銘を受けていたユウにとっては、当然、期待するものがあつただが人生経験が豊富なものが居れば必ずこう言うだろう。

現実とは常に非情であると。

そんなこととは露知らず、期待に胸躍らせたユウは、喜色満面転移門に飛び込んだ。

6・魔都アルゲード？

問、失った感情と徒労感に対して賠償請求は可能か？

↓否、現実是非情である。

時刻は夕刻。西日に焼かれモヤの掛かった街並みがずらりと見える。まさにそこは、様式美もへったくれもない完全なスラムだった。50層の転移門を抜けて現れた情景に絶望したオレは、アルゲードの人ごみにさらに辟易とさせられた。どこを向いても人ばかり、スラム然とした怪しげな街並みでは商人プレイヤーは言わずもがな、NPCまでもが真つ当な商品を扱っておらず、一癖も二癖もあるような奇妙な商品を取り扱っている。

（卵かけ焼きトカゲなんて誰が喰うんだ…）

ふと見ると、歩き食いしているキスカの姿。

「ん？ユウも食べる？」

「お前かよ！」

卵かけ焼きトカゲを美味しそうに頬張る姿を見てオレは心底げんなりする。

どこを向いても人、人、人。オルグ曰く、このスラム街アルゲードは現在攻略組を含めた全体的に見て上位のプレイヤーの多くがホームとしており、中でも個人商店や建築物の物件が現存するどの階層よりも安い、というか爆安なため、商魂逞しい商人プレイヤーたちや高いホームを買えないギルドなどが集まり、それはもう雑然の一言に尽きる状態なのだという。

それにしてもこの人ゴミは尋常ではない。小さい頃に一度だけ行ったデイズニールランドを彷彿とさせるその混み具合に、それをさらに助長させるような細く入り組んだ街の造り。

転移門から歩いてまだ5分ほどだが、オレはもうすでに何もかもがどうでも良くなってきた。

そんな人ごみに四苦八苦しているオレをよそに、 GREEN
NOAH の面々は勝手知ったるなんとやらで、実に巧く人ごみを
すり抜けていく。彼らからはぐれたら終わりだと、そう心に決めて
歩みを速めるも、見失わないようにするのが精いっぱいだった。

「さあついたぞ」

オルグが既に疲れ気味のオレに向き直って言った。

「ここがホームですか？」

「んや、違う。鼻屑の買い取り屋だよ。さあ入った入った」

細い路地に隙間なくすし詰めのように並ぶ個人商店の一角、『買
います・売ります』の手書きの看板を掲げた何とも怪しげな掘立小
屋のような個人商店は、オレたち5人が入ると、それだけでいっぱ
いになってしまった。

開かれた出入り口を除く三方の壁は、上から下までぎっしりと小
さな引き出しで埋め尽くされていて、時折引き出しからはみ出して
いる怪しげな何がしかの皮やら物品がこの店の胡散臭さをいや増し
ている。

「おう、エギル！店、開いてるか！」

ダンダンと壁を叩き、縦に長い店舗の最奥に居る店主に届くよう、
オルグが声を張り上げた。

「んあ？うちの店は年中無休って…オルグじゃねえか！」

店の奥の方でなにやら帳簿をつけていた男は、立ち上がると大仰
に手を広げた。がっしりとした図体の上に黒人然とした強面を乗せ
た、見上げるような大男だった。しかも唯一カスタマイズ可能な頭
髪をスキンヘッドにしているものだから、その恐ろしさは推して知
るべしである。あれほど大柄なオルグと肩を並べる存在がネットゲ
ームをプレイして、あまつさえログアウト不可能になったかと思う
と不可思議さというか奇妙な可笑しさを感じたが、まあこのゲーム
をプレイした理由は人それぞれ、自分も例外ではないのだから端に
置いておく。

ゴツい男二人は固く握手すると向かい合い、肩に手を乗せあつて

話し始めた。

「昨日ぶりだなエギル！いやあ、お前の偽情報に騙されて先物したエリートラビットの皮400枚が上位交換で紙切れ同然になって、大損こいたが元気か！まったく狭苦しくて最悪の店だな！」

「がははオルグよ、情報を制するものはすべてを制するつてな！最新情報に疎いロートルがナマ言つてんじゃねえよこの情弱が！うだうだと何カ月も前のネタを引きずりやがって！で？今日は何の用だ、買い取りか？買ったたいてやるから覚悟しやがれ」

がはは、と笑い合う二人。

（笑つてねえ、この二人、目が全然笑つてねえよ…）

「ああそうだ、これを頼む。買い取りだ」

オルグが指を振つてインベントリを可視モードにし、その中身を店の店主エギルに見せた。

「オーケイ。ちよいと待つてな、エリートリザードの皮38枚に看守の鉄くず56個…なんだよ、くずアイテムばかりじゃねえか。まあこのフレイムリドラの羽毛は高級素材の一つだから、ちったあ値は張るがなあ…」

「で、どれくらいよ」

パチリパチリとそろばんをはじいていた手を止め、これくらいだな。とエギルは値段を提示した。その値段にオルグが目を見張る。

「おい、ふざけんなよ。これだけアイテムがあつて15kつてこたあないだろ！」

バンバンと番台を叩くオルグにしれつとした顔でエギルが言つてのける。

「うちは安く仕入れて安く売るがモットーでね」

「そいつは聞き飽きた、20k」

「っざけんな、16k」

「8.5」

「7！」

「7.5」

「な…7・2！」

黒い禿頭がプルプルと小刻みに揺れる。

「売った！」

「商談成立、地獄に堕ちろ！」

「お前がな！」

ゴツンと拳を打ち合うオルグとエギル。

見ているこつちがはらはらしてくるような交渉合戦は、どうやらオルグの勝利に終わったようだ。

「はっはっは、二度と来るんじゃないねえ」

につこりと笑顔で見送る傍ら辛辣な捨て台詞をはくエギルを置いて、オレとギルド GREEN NOAH の一行はエギルの個人商店をあとにした。

「なあ、キス力。いつもあんな感じなのか？」

「まあ、大体あんな感じだね」

たはは、と笑うキス力。もしオレがこのギルドにはいったら毎回この交渉を見る羽目になると思うと少しうんざりした。というか疲れた、いつ殴り合いのケンカが始まるかわかったもんじゃない。まあ主街区圏内だから人を殴ることなんかできやしないんだが。

「まあ、エギルさんも悪い人じゃないんだけどね。安く仕入れて安く売ってるのは本当だし」

とマミヤが言う。

「あれくらいで丁度いいんだよエギルは。陰であくどい商売してるんだからな、かなりの利益を上げてる話だ。それでも下層の連中からの信奉が厚くて、傑物扱いされてる。まあ儲けた金のほとんどを低層の連中に寄付してるって話でね」とオルグが頭をかきながら言った。

「へえ、ああ見えてエギルって人は見た目にそぐわない優しい人間なんだな」

「たまに客を食い物にするけどな！」

感心した、というオレの言葉にカーディナルが茶化して言った。

長い路地を抜け、ゴミゴミした街路を歩くこと十数分、スラム街の中でもかなり奥まったところに、GREEN NOAHのイギリスのアパルトメントのようなギルド本部があった。

「ようこそ、私たちのギルド本部へ。ここまでの道のりは結構複雑でね、防犯も兼ねてるの。まあ私たちギルドメンバーにはビーコンがあるから迷わないんだけど。…あなたもギルドの一員になれば、マップ上に表示されるようになるから心配ないわ」

とマミヤが解説した。

「まあ見た目は悪いが中は大したもんだよ。俺たちにはちょうどいい広さだ、部屋もいっぱいあるしな」

「水周りがちよつと貧相なのが玉に瑕だけだね」

と、カーディナルとマミヤが笑い合う。

確かに思い返してみるとどこをどう歩いたのか思い出せない、かなりの回数道を右に左に曲がった記憶だけがある。オルグの言うところによると、このアルゲードの街はそれ自体が迷宮のようになっているらしく、何の知識もない旅行者が街路に迷い込み、たびたび行方不明になるという笑えない事件が多発しているのだそうだ。

「そんなことより、お前たち二人は行くところがあるのだろう」

ずっと沈黙を守っていたゲンノジが久しぶりに言葉を発した。背が低いかわりに筋肉質な彼は存在感が薄いはずはないのだが、たびたびオレの意識から姿を消す。

「そうそう、忘れるとこだったよ、ありがとね、ゲンノジ。あいつは朝方は情報収集で出ずっぱりだからね、夕刊ポストの編集長になつてからずとそうなの！さあ、行くわよユウ！」

と、音高く靴のかかとを鳴らすキスカをオレは追った。いつてらっしゃいとギルドメンバーに見送られて。

「おい、行かつてどこにだよ、キスカ」

「何よ、言っただしよう？あの女捜してあげるって！」

「え、マジだったのか?!」

「何よその言い草、任せなさいって」

えへん、と腰に手を当ててふんぞり返るキス力。

「ってまってよ、夕刊って新聞社ってことじゃないか」

「そうよ」しれっと、もはや威張る勢いでキス力は言った。「あたし愛用のね・ず・み」

「マジかよ……」

オレはたまらず頭に手をあてがった。新聞社と言えば情報屋、情報屋と言えばねずみだ。ソードアート・オンライン 開始以降、情報屋の提供する様々な有益な情報は何人ものプレイヤーたちを救ってきた。さらに言えば、娯楽の少ない アイン・クラッド のこと、新聞は数少ない娯楽の一つだ。だから時たまタブロイド紙のような一面を見せることから、一部の人間にはあまり評判が良くないその揶揄として言われるのが情報屋〃ねずみというわけだ。

奴らはどこからともなく現れて、知らぬうちに情報をかすめ取る。情報を独占したい人間からしたらいい迷惑。嫌われて当然である。

「まあ信用してよ、腕だけは確かだから。腕、だけは、ね。…まあ、他はノーコメントだけど」

「ごちゃごちゃとしたスラム街を足が遅いとキス力はオレの手を取って歩く。」

これから会う人物についてキス力は肩をすくめて見せるが、オレの思考はネガティブな方向にばかり向かおうとしていくのだった。

「ようこそいらっしやいませ。ゆりかごから墓場まで、どんな情報も素早くお届け、アイン・クラッド情報局アルゲード支部へ！お客様のご用件は情報の提供ですか？それとも情報の照会でしょうか」

情報の提供でしたら、ランク制となっておりますので、重要度の高い項目には――、と続ける接客用NPCを制して、キス力は言った。「いいえ、アポが取りたいの。夕刊部の編集長を出して」

「失礼ですがお客様、ご紹介のない方とのアポイントメントは――、

」

「いいからニコラに伝えて！キス力が来たって言えばわかるから」

「……かしこまりました、しばらくお待ちください」

一礼すると、接客用NPCは受付にウィンドウを広げると、新聞社の事務所の内線に電話を掛け始めた。この19世紀風の事務所は外の情景と同じく、ごちゃごちゃとした内装で、この受付を隔てる扉とガラス窓の向こうでは、それが制服なのか緑の足元まで伸びる濃緑のローブを纏った新聞社ギルド員たちがせわしなく歩き回っていた。

「はい、はい、キス力様というお客様が、はい、かしこまりました。そのように」

内線通話を終えたNPCがキス力に視線を合わせた。

「あの、お客様？うちの者はキス力様などというお方は存じ上げないと申しておりますが……」

その言葉にキス力が切れた。

「あんのくそタヌキ！」

キス力は右腕の人差し指と中指を揃えて振ると、手元で何かをいじり始めた。とすると瞬間、キス力の右手が輝き始め、自身の身の丈よりも長い棍が現れる。ツカツカと足音を響かせながら『STAFF ONLY』と書かれた事務所に続く扉の前まで歩み寄ると、無言のままスキルモーションへと姿勢をとった。

「ちよつ、ちよつと待て、キス力！」

「お、お客様！困ります！」

「ガイイイイイン！」

破壊不可オブジェクトを示す紫のライトエフェクトの火花と大音響のヒットサウンドが狭い窓口に散り、響き渡る。キス力はそれを意に介さず、華麗に棍を振り回すと、続けざまに連続技を放った。

「出てきなさいニコラ！でないとこの扉、出てくるまで殴り続けるわよ！」

ガインガインと10合ほど殴りつけると、たまらず小柄な少年が飛び出してきた。

「やめいやめーい！」

これまた小さい、オレの胸ほどまでしかない少年が、手を大仰に振り回しながらキス力を止めた。

「やっと出てきたわね、ニコラ」

すつと構えを解くキス力。

「わかった、わかった、降参だよキス力。とりあえずその武器をしまつてくれ。話はボクの部屋で聞くから」

「素直でよろしい」

キス力は武器をアイテムストレージに放り込むと、勝手知ったる顔で事務所の中に入っていた。何事かと新聞社ギルドの面々から容赦のない視線を浴びせられ、当然のことながら、オレは頭を抱えずには居られなかった。

？

7・魔都アルゲード？

雑然として資料の山があちこちに散見できる編集室の奥、資料室兼ニコラの私室であるこの六畳ほどの部屋は、天井までびっしりと背の高い書棚や記事の資料なのだろう、詳細不明な書物で四方を囲われており、その反面ニコラの机の上は緑の外套を目深に被った胡散臭い見た目からは想像できないような几帳面さとファンシーさで整理され、彩られていた。

一応プレイヤーメイド品なのだろう、猫の小さな置物が机の片隅で可愛らしく丸くなっている。

ユウがほうほうと物珍しそうに周りを見ている横で、キス力がさっそくと要件をニコラに伝えた。

「人を探して欲しいの」

その言葉にさっきから何故か意味ありげな表情でユウを値踏みしていたニコラは、キス力の言葉にわかりやすいほどに落胆の色を見せ、柔らかな安楽椅子に身を沈めるとつまらなそうな声を上げた。

「人探しい？そんなもん新聞に立派な訪ね人コーナーがあるんだからそこに投稿すりゃいいでしょ、まあ掲載料は別途戴くけどね」

「そんなまどろっこしいことやってられないのよ、今すぐ情報が欲しいの」

とキス力はすかさず食い下がった。

「情報は二つ、着物姿の妙齢の女性で、素手で大量のモンスターとやりあえる程のスキルのある、高レベルプレイヤー。これだけ情報があれば、アンタならささっと出てくるでしょ？」

そしてキス力は自分たちギルドのパーティが48層迷宮区で悪質なトレインMPKに遭遇したこと、しかもそれはクリスタル無効化空間を利用した殺意ある行動であったことなどをできるだけ細かく説明した。そしてオルグから得た 軍 の動きについても詳細に伝える。まあ 軍 の動きに関して言えば、正直彼ら情報屋の方が耳

が早いとユウは思ったが…。

「なるほど、やはり 軍 の影響下にならない40層以降の階層にメイ
ンの狩り場を移したか…」

ふむふむ、とキスカよりもずっと小柄な緑のフードを被った人物、
名前はニコラという、が何か意味ありげに思考をめぐらせている。

「…ふん、まあいいだろう。最近ちまたを騒がしてるMPK事件に
関して実体験をしたやつ、しかもその生存者のインタビューが聴
けたんだからな。これで貸し借り無しだ、調べてやるから、ちよつ
と待ってな」

そついうとニコラは椅子を回転させて馬鹿でかい書類棚に体を向
けた。その中から一冊のファイルを取りだし、ページをめくってい
く。

「ええと…あつた、こいつだ」

とニコラが分厚いファイルをユウとキスカに見えるよう、開いて
よこす。

簡単なプロフィールに所属ギルド、さらにはスクリーンショット
までもが添付してある。そのSSを見る限り間違いないこの女だつ
た。

「そいつはたぶん『風』のシズカ、だな。着物姿の妙齡の女性でレ
ベルは不明、だが実力はロングレンジとしてはトップクラスって触
れ込みだ。いや、正確にはだった、だな」

「どういうこと？」とキスカが訊ねる。

「そいつが高レベルとして名が通つてたのは25層までの話なんだ
よ。ちなみにそれ以降は、一切フロアBOSS攻略に参加してない
だが無手つてのが解せないね、そいつは薙刀使いだったはずなんだ
が——。それにマージン性が確立した現在でも、他を寄せ付けない
くらい高レベルかどうかで聞かれたら、正直分からん。まあぼち
ぼち賞金稼ぎとしてはお金を稼いでるみたいだけだ」

ニコラの解説を聞きながら、ファイルの情報を見てキスカは唸つ
た。

「もしかして アイン・クラッド 上の全プレイヤーをファイリ
ングしてたりするんじゃないでしょうね？」

その言葉にニコラは大仰に肩をすくめて見せた。

「まさか！一度でも話題に乗ったプレイヤーだけだよ、まあ攻略組は大体網羅してるけどね。このシズカってヒトも当時は相当なやり手だったんだぜ？あんたんトコの GREEN NOAH が攻略組入りしたのは34層以降だったから、知らなくても無理はないけどな」

続いてニコラはユウに視線を向けた。

「ああ、当然あんたのことも載ってるよ。 両刃剣 のユウさん？」

ニコラは椅子から立ち上がりポーズを決めて言い放った。

「両刃劍のユウ、攻略組を相手取り無傷で破竹の11連勝！
一面でドカンといきまして、今朝の朝刊はそりやあもう、儲けさせ
てもらったよ！」

顔は見えないがニコラが現金に笑う様子がユウには感じ取れた。ユウが心の底からウンザリしたのは言うまでもない。

「で、これだけ？ 今住んでる場所とか、ホームにしている主街区とかはわからないわけ？」

「当然、知ってるよ？」

「じゃあなんでこのファイルには書いてないのよ」

「そりゃあボクの頭の中にあるからさ。プレイヤーの所在地はトッ
プシークレットでね、課長以上にしか開示しちゃいけない規則にな
ってるの。当然知りたければ……おーっと。これ以上は別料金です。
1000000コルただきます」

ニコラが仰々しく頭を垂れた。

その様子に引き気味のユウをおいて、隣に立つキスカからぶちりという音が聞こえた気がした。

「何？あんた、わたしたちから金取る気？」

静かに、だが確実に怒っている。その空気を察してすかさずユウが腰のポーチから1000コル銀貨を取り出し、どう料理してやる

うかと怒気を体から放出しているキス力を置いて牽制とばかりにニコラに投げてよこした。

「ちよつと、何してんのよ!」

「いいから、これは正当な取引だよ。こっちはプレイヤーの私生活を覗こうつていうんだ。これくらい仕様がないう」

屋台で買う『火吹きコーン』が10コルなのだから、ユウにとつても1000コルという情報料は決して安いものではない。だが、ここは払わなければ話が進まないのだからこちらが折れるべきだ、等々キス力に言い聞かせ、なんとかなだめすかした。

「まいどあり」

飛んできた硬貨を空中で掴むと、ニコラはフードから顔を出した。予想よりもずっと幼い少年の顔があらわになる。驚いたことにニコラの外見はどうみてもナーヴギア使用年齢制限よりも下回っており、ユウはこのゲームの魔力の恐ろしさを感じざるを得なかった。

さて、と一息を吐くと、ニコラは猫の置物のある片付いた机に座り直すと、机の上で手を組んであごを乗せ、着物女の居場所についてゆっくりと語り始めた。

新聞社ギルドを出ると、もう空は夕暮れを乗り越して夜の帳が降りていた。街の賑わいは最高潮を迎え、キス力とユウは人の少ない裏通りを歩くことを余儀なくされた。といってもユウはこの主街区アルゲードの街並みに明るくないので、キス力に手を引かれて歩いた。

表通りから一本内側に入ると、ごみごみした街並みはせせこましい街路となり、生臭いゴミ箱の匂いや浮浪者NPCが横たわる、それはそれは見目麗しい情景となる。この浮浪者NPCの中でも特定のNPCに順番にほどこしを与えると、お金が倍になって帰っていく

るというなんとも金銭欲をそえられる一度きりのイベントを受けられるらしいのだが、そのNPCは迷宮アルゲードの街のあちこちを自由に歩き回っているため、今のところクリアしたという情報はないそうだ。

どこをどう曲がったのかやはり分からないまま、ユウはキスカに連れられてギルド本部への道を歩いて行く。お土産に　大猪の肉まんを人数分買いそろえたキスカとユウは、肉まんが冷めないうちに帰るために、少しだけ歩みを早めていた。だから路地から現れた人影に気づくのが遅れ、キスカは思いつきりその人物に体当たりしてしまった。

「うわっ」

「おっと」

キスカがぶつかった男は長身で銀髪であり、身体の小さな少女ではないキスカは、弾かれて尻餅をついてしまった。「いてて」と唸るキスカに、濃紺のローブの袖口から驚くほど白く綺麗な手が差し伸べられた。

「大丈夫ですか？お嬢さん」

その手を取り立ち上がる。

「え？ええ、はい。大丈夫です。こちらこそごめんなさい、急いでいたものだから」

「いいんですよ」

銀髪の男は糸のような細目だったが、よく在るようにそこに邪惡な要素はひとつもなく、清廉潔白な笑顔だけがそこにあった。

「急ぐことは悪いことではありません。人間生きている時間には限りがあるものですから、急いで悪いことなどありませんよ。迷える者よ進め、さすれば道は開けよう。という感じにです」

「なんだかお坊さんみたいなことを言うんですね」

と、キスカが笑って言った。

「仏門にはいませんが、僧であることには違いありませんよ？」
にこやかな笑みを崩さず、男は告げる。

「え？」

「こう見えても私、牧師なんです」

「牧師って言うത്――、結婚式とかの？」

とユウ。

「ええそうです」

「懺悔を聞いたり？」

「ええ、たまにですがいらつしやいますね。迷えるものを導くのが私たちの役目だと思っています」

「はー、そんなロールプレイをしてる人達がいるんだ。知らなかった」

と、ユウは驚きの余りちよつとだけ失礼なことを言った。

ユウ自身、信心深さとは無縁の生活を現実世界でもしていたので、こういったことにはとんと疎かったのだ。だからこのゲームの虜囚になってからは、苦しんだり悲しんだりの連続だったが、神に祈ることだけはユウはしなかった。それは自身に絶対の自信があるとか、そういうことではなく、単に苦しくなったり不安になったりしたら神に祈るという習慣が、ユウにはなかったからだ。

「下の階層では結構多いんですよ？ 私たち教会の本部は第一階層のはじまりの街に本部を置いているんです。こうやって色んな階層に足を運んで、心を痛めたり、悲しみに苦しんでいる人々に救いを与えるのが使命であり、私たちの存在意義だと思っています」

この男の声音は優しく暖かくもあり、何より神の教えが人を救うことを全く疑っていない様子で、言い知れない安堵感を与える雰囲気があった。想像していたキリスト教と言えば、十字軍のことだったユウは、教えのために遠征をする人たち、位にしか思っていないなかったのだが、この男の言葉はユウに人を包み込む柔らかい印象を与えた。

「もしかして、リアルでも牧師さんだったんですか？」

「こ、こらユウ！失礼じゃない」

キリ力はリアルのことを聞くユウをたしなめたが、牧師の男は笑

みを崩さず、

「いいんですよ、お嬢さん。現実世界では牧師ではありませんが、カトリック教徒ではありますよ。私の家は代々そうなんです。このゲームでもそういう人達は何人が居まして、そういう者たちが集まって私たちのような集団ができたんです。毎週日曜日には第一層の大聖堂でミサをやっているのです、もしよろしければ来てくださいね。歓迎しますよ」

と笑いかけた。

「ちよつと面白そうだね。キスカ、今度行ってみようよ」

「えっ…ユウが行きたいなら、いいけど」

その声に男はこれは素晴らしいと大仰に手を広げると、喜びの笑みを隠さずに言った。

「ええ、ぜひ来てください。ああ、申し遅れました。私、シエラザードと言う者です。いつでも第一層でお待ちしていますよ、キスカ？さん、それにユウ？さん」

銀髪を腰まで伸ばした長身のシエラザードという男は、礼儀正しく一礼してみせた。

「おお神よ、この出会いの素晴らしいこと、感謝いたします」と十字を切る様子も様になっている。

ちよつと変な人かも、とユウとキスカは笑いあったが口にはしなかった。

「おつと、引き止めてしまいましたね。お急ぎなのでしょう？時間とは有限です、さあ私に構わず行ってください」

さあさあ、と二人の背中を押すシエラザード。

「そうだった、ユウ行こうか」

「そうだね、さようならシエラザードさん」

「ええ、さようなら。あなたの行く末に神の光のあらんことを」

二人が次の路地を折れるまで、銀髪のシエラザードは手を振り続けた。

キスカに手を引かれ歩くこと数分。ユウたちはやっとのことできリスのアパルトメントのような縦にひよる長いギルド本部に到着した。

ちなみにギルド本部の鍵はギルド員発行の通行証がその代わりになっている。一般のプレイヤーは入ることができない。だが例外として、ギルド員が一般プレイヤーに通行証を発行する場合がある。その例に漏れずキスカに通行証を作ってもらったユウは、玄関で扉に通行証を掲げると、扉はひとりでに開いた。

そしてキスカとユウが扉をくぐると、扉はひとりでに閉まり、自動で鍵が閉まる。ドアの動きに従って、カランカランと来客を告げるベルが鳴った。まるでホテルのオートロックのようで、ユウは「おお」と少しだけ感嘆の声を上げる。

その様子を見てキスカがくすくすと笑った。

「ユウはギルドの本部みたいなところに入ったこと無いもんね。番兵が用意できないような個人用のホームや小さなギルド本部はみんな、こういう作りになってるんだよ」

ギルド本部の内装は一言で言えば、ほんの少しくたびれた19世紀風の洋室に似ていた。日本の家屋に比べて天井がずっと高く、天井の八つの発熱電球をあしらったモダンな電灯が、温かいオレンジ色の光を毛の長い絨毯で敷き詰められた床や、部屋一体に落とし込んでいる。もこもことした足の感触にユウはさらに驚かされた。

「ああ、面白いな。驚いた」

玄関で外套をアイテムストレージに放り込んでいた二人に、二階から階段を降りてきたマミヤが笑顔で迎えた。

「お帰りなさい、ふたりとも。その様子だと情報は得られたみたいね」

「ただいま、マミヤ姐さん」

「お邪魔します」

挨拶を終えると、キスカはユウのそばを離れ、それで聞いてよマミヤ姐さん、ニコラったらね、居留守使ったのよ！とマミヤの前に

躍り出た。キス力はさも怒り心頭というように「あんまりムカついたから、ドアをぶん殴ってやったよ」とのたまい、胸を張っている。そんなキス力にマミヤは「あらまあ」と笑顔を見せた。

「それでね、さっき途中で牧師さんに出会ったんだよ。そんなロールプレイしてる人なんて初めて見たからユウもわたしもびっくりしたよ」

「へえそうなの。こんな所にも来ているのね」

「知ってるの？」

「まあ、話だけはね」

と、マミヤは少しだけ過去に思いを巡らすような表情で言った。

「その人達はね、アイン・クラッド統一教会って言って、第一層ではそれなりの規模の信徒がいるのよ」とマミヤはユウたちに丁寧に教える。

「へえそうなんだ。あつと、忘れてた。はい、みんなの分のおみやげ」

「あら、みんな喜ぶわ、ありがとう。そうね…もうすぐ夕食だから……キス力、ユウさんを5階の客間に案内してあげて」

「はい」

マミヤとキリカの二人の様子をただ見守っていたユウの手をキリ力は取ると、部屋横の階段へとユウを連れていった。そのまま現実世界ならかなり足にキていただろう、急な階段を5階まで一気に登り、短いエントランスを通ると左右に扉のある突き当りに到着する。その突き当りには花が添えられ、質素ながらもマミヤの気品がうかがい知れた。

「左の扉が物置で右の扉がユウの部屋の客間ね。ご飯になったらメルを送るから、と言ってもすぐ呼ぶことになると思うけどね」

「わかった、ありがと」

キス力と別れ、ユウは一人扉の前に立った。古くて厚い扉、部屋番号なのか501と描かれた銀のプレートが目線とほぼ同じ高さについていた。

ドアを開けると左側に大きなベッド、右側に小さなデスクと椅子、両開きの窓の窓辺には安楽椅子があった。足元は廊下同様、毛の長い絨毯が敷き詰められていてやわらかい。クリーム色の壁紙はやはり少し煤けていて時代の経過を感じさせる作りになっていた。

ユウは後ろ手にドアを閉めると鍵をかけ、分厚いブーツとがっしりとした胸のプレートアーマーを脱いだ。足裏で絨毯の感触を味わいながらベッドへと向かうと仰向けに倒れこむ。安ホテルとは比べものにならないやわらかな寝心地に、ユウはひとつ息を吐いた。

視覚が索敵スキルに応じて夜間仕様となり、窓から差し込んだ月のあかりが部屋の全景を淡青く照らしだす。索敵スキルがそこまで高くないユウでも50層外縁の夜空は、澄み渡るほどの冬晴れであるため、星と月の光の間接照明だけで視野自体には困らない。だがあえてそこで目をつむり、今日あった出来事を回想する。

流れるような体捌き、一片の無駄のないように見えたあの動き。武道の心得のないユウにとって、あの着物女、シズ力といったか、が見せた体術は衝撃以外の何者でもなかった。おそらくスキルレベルは上限に達し、さらにその先にあると言われる極致、すなわちスキル値に依存しない純粹なプレイヤースキルによる技術をそこに垣間見たユウは、自分との差に胸が痛くなった。あの女と比べるとユウの体術は喧嘩殺法、剣術はチャンバラにすぎない。いや、ほとんどのプレイヤーはシステムアシストに振り回され、その域から出られない。だがそれではダメなのだ。

どうしようもなく強さを欲してしまうこの身体は、今の自分に満足できず、そして同時に限界を感じていた。

片手剣スキルと体術スキルを共に900まで成長させたユウ自身だからこそ分かる己の限界。ステータス的なしきい値を打ち破るには今のままでは到底及ばないことを実感する。

何かを見つけないといけない。

スキル限界値の示す境界のその先へと至る道を――。

ユウは手の甲を額に当て、自身のスキル連鎖を再認識する。そし

て今日垣間見た新たな現実、着物女のシズカから技を盗み、最構成していく。

（明日になれば逢うことができる、出会えば即、決闘になる）
そんな予感が、ユウの中ではだんだんと確かなものとなっていた。

「戦って勝てなくてもいい、ただ手合わせしてみたい。今の自分では勝てなくとも、きっと何か得るものがあるはずだ」

——ピロリロリン。

画面右端にメール着信のアイコンが光った。右手の人差し指と中指を振ってアイコンをポップさせる。

「ご飯ができたぞ！急いで二階食堂に集合すること。キリカ
キリカからのメールだった。」

ユウはベッドから身体を起こし、いつも通り角張った胸のプレイトアーマーと、厚手のブーツを装備すると、勢い良くベッドから立ち上がった。

8・『風』のシズカ？

いつもと同じ朝がやってきた。涼やかな管楽器の調べに乗せて、ユウはゆつくりとまぶたを開いた。ベッドは普段より数段柔らかくユウの身体を包んでいたが、柔らかうがたとえおんぼろで板にシュー一枚で硬かるうが、肉体的疲労の存在しないこのゲームの中では基本的に差異は無い。強いてあげるならば、目覚めたときの印象に違いがあるくらいで、その点においてはやはり柔らかいに越したことは無いのもまた、事実だった。

羽毛の敷き詰められた枕に名残惜しそうに一度顔をうずめてから、ユウはこのシングルベッドから身体を起こす。

昨夜、情報屋のニコラより得た『風』のシズカの居場所へ向かうため、ユウは昨晚の夕食の席でキスカと交わした約束の時間（キスカはユウがシズカに逢いに行くのに同行すると言って聞かなかった）、よりもかなり早い時刻に目を覚ました。

窓の外が未だ宵闇が色濃い様子を確認してから、ユウは装備を寝巻きからいつもの半甲冑姿に着替えた。501号室をあとにすると、すぐそばに続く階段を下りていく。SAOは各々の部屋とその部屋の外とはシステムの断絶しているので、外でどんなに騒ごうと音が伝わることは無い。これが現実世界なら、火事や不測の事態に対応できないこの完璧な遮断に若干の憂慮を抱くところだが、ユウたちプレイヤーが居るのは所詮ゲームの中に過ぎないのだから、件の火事や不測の事態など起こりようがない。そういった意味では主街区内は、ゲーム内でもっとも安全な地帯と言える。各部屋を隔てる扉も、一度閉じれば外から開けることは適わない。外から唯一許されたアクセス手段も、ドアを二回ノックしない限りは外の音を拾われることは無い。

だからそんなに気負う必要は無いのだが、ユウはなんとなくいつもより心なしか足音を忍ばせて階段を下りていった。縦に細長いア

パルトメントのような建物から息を殺して外に出たユウは、慣れた手つきで右手の人差し指と中指を揃えて振り、50層主街区アルゲードのマップを呼び出すと、目的地の他の階層に続く転移門を示すビーコンを頼りに、まだ街灯の灯る2月の寒々とした街並みへ歩き出した。

「寒いな……」

昨夜はあんなに人いきれで熱気があったアルゲードの街も、まだ日も上がらない早朝とあっては、無機質で雑多な様相を示すこの街が余計寂しく、そして冷たい印象をユウに与えた。

人の有無とはこんなにも違うものなのだと、徐々に早く起きたユウは誰も居ない街路を歩きながら独り思う――。

正直言って最初からキスカと示し合わせて相対しに行くことなど、ユウは考えていなかった。

これから行く場所は、いかな主街区圏内とも言えどもそこは賞金稼ぎの住まう場所。賞金稼ぎがマミヤの言うように「まとも」な人種でないのだとしたら、そんな危険な場所にキスカを連れて行くわけにはいかない。

頬をなでる風は複雑な街路を通り、吹きすさぶ大気は冷たい。

分厚いブーツは保温性と断熱性に優れているので、棘のように冷たいはずの石畳の上も難なく進むことができる。一般的な冒険者にカテゴライズされるユウのプレイスタイルは、キスカと違って当然のように見た目より性能を重視しているのでこういった気象問題には左右されない。当のキスカはファクションは我慢なのだからか、たまっていたが、ユウにはゲームの世界くらい気を遣わず適当で居たいという思いがあった。

キスカに対し、言い知れない苛立ちをユウは感じ始めていたのだ。これは剣士としての誇りを賭けた戦いなのだ、物見遊山気分ですいてこられては困る。

カツカツと足音をならしながらユウは道を急ぐ。

マップを頼りに最短距離を行くため、裏路地を歩いたり大通りを歩いたり情景の変化が目まぐるしかったが、ユウの心中も同様複雑に入り組んでいた。

おせっかいなキス力、自分勝手なキス力、彼女の心配も一方で理解していながら、それに素直になれない自分の幼さ、そういったすべてのことに心はささくれ立つように揺れていた。

賞金稼ぎ。

モンスターを狩り、時には人をも狩る比類なき殺しの力。その中でもほぼ頂点に座すであろう人物、『風』のシズカとこれから相對するというのがこんな気持ちで大丈夫なのか。いや、当然ろくなことにはならないだろう。それでも戦いたいという、もはや意地のよくな境地で足音高く歩みを進めていた。

ぐるぐると渦巻く脳内をよそに、顔を上げると目の前にいつの間にかくると魔方阵を回転させる転移門が現れていた。重い心と身体を引きずるようにして、転移門に身体を触れさせようとしたそのとき、思わぬ人物から声をかけられた。

「待ちなさいよ、この朴念仁」

さつとユウは振り向いた。見ると先ほどまでユウの心の中をぐちゃぐちゃに荒らし回っていた当の本人が建物の影からすつと姿を現した。

キス力だ。

東から登った太陽に照らされて、コントラストの強い光の中で、キス力の黄色い装備は目にまぶしく、ユウはさらにいらだたしく思った。彼女は光に生きている。

「これはどういうことかな？ユウ。また抜け駆けだなんてずいぶんとナメたことしてくれるじゃない」

「うるさいな、オレの勝手だろう」

キス力の目を見て話することができない。視線を斜め下に泳がせながら、精一杯相手を傷つけない程度に拒絶する。だがそれが良くなかった。

「うるさいって…ユウ！私がどれだけ心配してるか、知らないくせに！そういう風に言うんだったら、ユウが拒絶しようがどうしようが私はついていくからね！あの賞金稼ぎの女の人にケチヨンケチヨンにやられて泣き喚くユウをこの目で見てやるんだから！ユウも勝手なら、私も勝手にさせてもらうもん！」

キスカの顔がやや誇張気味の感情エンジンのもと真っ赤に彩られるも、「そう、勝手にすれば」と、ユウは冷たく言い放つ。こと剣のことについては、キスカの楽しげな、悪く言えば真剣みのない態度にユウは苛立っていたのだ。

これではまるで子供の喧嘩だ。

そうとは分かっているけど、ユウはキスカがユウの 剣士としての強さを求める気持ち や、 レベル的に劣ることの焦り を、本当の意味で理解していないと思っていたし、それよりも何よりも、良い仲間に恵まれると言う幸運の巡り会わせと、攻略組の一翼を担うまでに成長したキスカのステータスの強さに隠しきれない劣情を抱いていた。それがついに爆発してしまったのだ。

レベルも低く誰からも相手にされず、常にソロで戦い、それでいて死線をくぐる度胸もなかったユウの気持ちなどキスカに分かるはずがない。そうユウは決めつけていた。

「転移、エンシエルト」

キスカを待たず転移門に向き直るユウは、目的の場所である第53層主街区エンシエルトへ向かう呪文をぶっきらぼうに宣言した。

「転移、エンシエルト！」

消え去るユウを追って、キスカも転移門に飛び込み宣言する。

時刻は朝の5時を少し過ぎたところ。これから向かう場所で長い一日を過ごすことになるなど、ユウは、そしてキスカも知る由もなかった。

ふわりとした浮遊感の後、重力が戻ってくる。

転移門を通過する度に何度も感じるこの感覚を、苛立ちのせいもあってか今日は特に目障りに感じる。光りに包まれた視界が薄ぼんやりとはけ、視線の先に日本の江戸時代を彷彿とさせる武家屋敷群、第53層主街区エンシエルトの街並みが広がるのが見て取れた。

新聞屋ニコラの情報通り、大小様々な商店の並ぶメインストリートと、家屋同士を隔てる低い塀が織り成す細く狭い横道で構成されたこの主街区は、かつてリアル世界のテレビの再放送で見た水戸黄門のそれや、歴史の教科書に出てくる絵巻のイラストと酷似していて、オレ自身が日本人だからだろうか、何故か気持ちしが和らぐような不思議な気分になった。

しかしこと服装に関して言えば、NPCはみなこの街並みと時代設定を同じくする着物姿で、西洋風甲冑もどきに身体を包んでいるオレの存在は場違いこの上ない。

この街をホームにしているプレイヤーもどことなくオリエンタルな見た目であり、ロールプレイをしていないオレはお上りであるがこの街の住人ならすぐに知れるだろう。

そしてキス力といえば、まだ怒りが収まらず怒気をあらわにしており、しかしオレを見失わないようにか、ある程度の距離を置いて後ろからついて来ていた。転移門を出てからもう5分はたったが、オレとキス力の間に会話は一言もない。

珍しものの好きの本来のキス力なら、そこかしこで歓声の一つでも挙げるはずだが、完全にだんまりを決め込んでいるようだ。いや、キス力は攻略組なのだからこの街がはじめて来る場所である可能性は低い。彼女は迷宮区を踏破した後フロアBOSS攻略に参加し、各層のアクティベート（階層と階層をつなぐ扉を開く行為）に立ちあう場面も多いはずなのだから、この街にも一度くらいは来たことがあるのかもしれない。

まあどうでもいいことだ。

今オレにとって重要なのは、これから申し込む『風』のシズカと

の決闘だけであり、勝手についてくるお節介のことなど思考の端においておくことすら勿体無い。

腰に刀を挿した武士風の番兵NPCに目的地の正確な場所を聞いたオレは、他の層では石畳ばかりのはずの地面が赤土で固められたものであることに少しだけ驚きながら、シヤリシヤリと足音を鳴らして街の中心部からほんの少し東側に位置する、目当ての屋敷に足を運んだ。

その屋敷は、歩く道すがらに見た武家屋敷の中では一際大きく、立派な門構えをしていた。門の軒下の門がまちには 無限一心流と達筆な彫り文字の施された木製の看板が掲げられ、この屋敷が道場を模したものであることにオレは気付く。

「ここか…」

と、門の前で立派な看板を見上げていたオレに女性の声がかけられた。

「何か御用でしょうか？」

視線を上から通常的位置に戻すと、肩ほどで黒髪を切りそろえ、着物姿の上にエプロンをまとった女性が、箒を片手に思案顔でオレを見つめていた。

「この屋敷の方ですか？」

そう問うオレに警戒心をあらわにしながら、その女は答えた。

「ええ、ここで女中をさせていただいています、ルウサと申します。失礼ですが、何か御用でしょうか？」

訝しげな表情でいうルウサと名乗った女性に対し、オレは居住まいを正すと

「こんな朝早くからすみません、シズカさんという方はご在宅でしょうか？」と問うた。

「残念ながら、家主は外出しております。もう半時もすれば帰宅すると思われますが、何か言伝をうかがいましょうか」

肩透かしを食らった気分だったが、あと半時というなら待つのもやぶさかではない。そう思い、背後に立つキス力を無視してオレは

言った。

「ああ、いえ、出直します」

そう言うつと屋敷を後にしようと、ルウサに背を向ける。

「その必要はないぞ」

門の前から立ち去ろうとしていたオレを張りのある声が呼び止めた。あの、魔物たちに囲まれ、死を覚悟した時に聞いた声と同じ、凜とした声音。振り向くと、着物姿に羽織を引つ掛けた女傑が、煙管をふかしながら道のと真ん中に腕を組んで立っていた。

「家主なら私だ、何のようだ？ 仕事の話なら今は手が空いていない、他をあたってくれ」

その立ち姿にオレはゴクリと唾を飲み込んだ。

「『風』のシズカ……」

「ずいぶん懐かしい名を聞いたな。どんな伝かは知らんが、私の仕事は高く付くぞ」

ふう、と煙管から口を離し、早朝の冴えた空気に白い煙を吐く着物女はピンと張った姿勢で冷たい視線をオレに寄越した。

「いえ、仕事じゃありません。オレは、貴女と決闘がしたくてここに来ました」

オレの言葉を聞いて、訝しげに形の良い眉をゆがめるシズカ。賞金稼ぎを尋ねる人間など商談主ばかりだろうと思っていたのか、それとも呆れたのか、キスはくるりと煙管を手の中で回すと、オレを生ぬるい視線で見つめてきた。

「何？ チャンバラがしたいのか。そんなもんその辺に役者がいくらでもいるだろう、なんだって私とする必要がある」

「オレは昨日あなたに助けられました。そのとき見せた強さ、あれは尋常じゃない。オレはあなたと手合わせして、さらに強くなりたんだ」

オレの熱弁を聞いてシズカの眉がぴくりと動いた。ああ、あの時のガキか。そう呟くと尚一層難しい顔になり、

「でも、どう転んでも、私と戦ってお前が何かを得るなんてことは

無いよ」

と着物女はあくびを噛み殺すような表情でオレの前を通り過ぎると、立派な門の中へとふらふらと歩いて行く。

「どうしてですか！」

その後ろ姿にオレは知らず声を張り上げていた。

そんな言葉にさも面倒だというような顔で振り返ったシズカは、オレの自尊心をズタズタにするような言葉をつらつらと述べていった。

「お前、私が助けたとき、正直チビリそうになってただる。戦士としての威勢もなく、戦いの一戦一戦が、このデスゲームから脱出するための戦力となるという自覚もなく、ただ闇雲に剣を振るっただけだろう。そんな奴に盗まれる技術なんか、私は持ち合わせてないよ。わかつたら帰りな」

話は終わりだ、と手を振るシズカに尚もオレは食い下がった。

「そんな、せつかくここまで来たのに！ たった一度のデュエルもしてはくれないのですか？」

その言葉にシズカがビクリと肩を震わせた。

「たった一度つてお前なあ」

物分りの悪い子供の相手をするような口調で、シズカは苛立ちを顕にする。

「戦いで自分の实力を見せることが、どんなに危険なことかお前は分かってないんだよ。武器を振るうつてのは遊びじゃない。生きるか死ぬか、得るか失うか、二つに一つ、その二種類しかない。そしてお前は、お前の言うたった一度のデュエルをする相手としては役不足だ。何故役不足かって？ そりゃ自身の剣を信じることも出来ず、覚悟も意気地もないガキの相手はごめんだからだよ。わかつたか」

「……くつ、でも、くそっ」

言い返す言葉がない。オレは40数体のモンスターに囲まれたとき、確実にビビっていた。恐れ慄き、自分が今まで鍛えあげてきたスキルを、剣を投げ捨てて命乞いをしようとしていた。そんなこと

がデータであるモンスターに通用するはずはないのに、それを認めてもらいたくて、半狂乱になって剣を振るった。恥も外聞もなく、無様な剣を振るったのだ。

それは愛剣 ブラウ・ソード の誇りを汚したに等しい。

そんな風に悔しそうに視線を下げてしまふオレを見て、いたたまれなくなったのか、後ろについてきていたキス力がたまらず声を上げた。

「いくら何でも、あんまりじゃないですか?!ちゃんと話すのは初めてなのに、ユウの弱いところをねちねち、ねちねち、戦ってあげたらいいじゃない!」

「キス力は黙ってるよ!」

と、オレはつい声を荒らげてしまった。キス力の顔がみるみる怒りに赤くなる。

「なあ、さつきから気になってたんだが、この黄色いのお前の何? そっぴい昨日も居たけど」

「腐れ縁です」

さっきのことがあった手前、オレは素直に友人とは言えなかった。数少ないデスゲームの開始当初からの友人であるというのに、それをオレの自尊心は無意識のうちに拒否していた。

「ふうん、まあなんでもいいが。お嬢ちゃん」

「な、何よ」

「こんなつまらんヤツになんで肩入れする。私の見立てじゃあ、お嬢ちゃんの方がこのガキよりもひとりは強い」

一瞬で見抜かれた。キス力は一瞬たじろいだが、持ち前の負けん気で言葉を返す。

「たしかにユウは経験が豊富とも言えないし、いざというとき度胸があるとも言えない。でもユウはユウなりにがんばってるんだ。そのがんばりを受け止めてくれたっていいでしょう?!」

はあ、と煙管を口から外して白い煙を吐きながら、シズ力はその頭の横で一本に結わえ、肩から胸に垂らした髪を軽く撫でた。

「そうかい、何がお嬢ちゃんをそうさせるのかはわからないけど、でもまあ。どうしても勝負がしたいって言うなら、そうだなあ……」

その声を聞き、半ばからへし折れたオレの心が少しだけ立ち直る。しかし、その後に続く言葉にオレは愕然とした。

「そうだ、ルウサ。お前、相手してやれ」

「わたくしが、でございますか？奥様」

箒を手にして、門の端で主を迎えていたエプロン姿に着物の女性
は、抑揚のない声で己が主人に問いただした。

「そう、お前だ。ガキの手筋は昨日見たから大体覚えてるが、どうも相手をしてやる気にはなれん。それに私は手加減が苦手だ、お前ならその辺も上手くやれるだろう？」

「はあ、左様でございますか」

「そうそう、左様左様。じゃ、ちゃっちゃんと頼む。私は徹夜で迷宮巡りをしてたんでね、さつさと布団に入りたいんだよ」

そういうとシズカはエプロン姿のルウサを自分の前に押しやった。
「奥様がこうおっしゃられていますので、それではお相手を務めさせていただきます」

「ちょ、ちよつと待ってください！この人剣もなにも持っていないじゃないですか。しかもお手伝いさんでしょう？こんな人とは戦えない！」

オレは当然狼狽した。ここまで散々にけなされてきたオレだが、さすがにその怒りを傍目から見て戦えそうもない、女中相手に発散するわけにはいかない。だが、そんなオレの進言にシズカは口元を歪め、

「そうか？だが多分ルウサはお前のその横に居るそのお嬢ちゃんよりも、さらに一周りは強いぞ？」

まあ、私には敵わんが、とニヤリと笑ってみせた。

その様子に二の句を告げられずに居るオレを尻目に、ルウサと呼ばれた着物にエプロン姿の女中は、門扉を出た先の屋敷に面した通りに陣取った。

「どうなっても知らないぞ！」

ルウサに合わせその対面、約8メートル離れた場所にオレは足を運ぶ。この女中が如何に強かろうと、所詮は非戦闘員。この人を倒せば、シズカも心変わりするかも知れない。だとしたらこれは好機だ。

ある程度の距離を置いて相対する女中を見つめながら、ここに来てオレはそんなことを考えていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9994y/>

ソードアートオンライン ～ 剣を継ぐ者～

2011年11月30日13時03分発行